始

家庭新講談

第二編

祖先の家

帝國圖書館藏書

大正
2. 7. 14
内交

特100
581

祖先之家

發刊の主意

一家團欒して、面白く、愉快に讀んで行く中に、識らず〳〵智情意の發達を助けて行かうとするのが、本書の目的である。

皆知名の文士が熱血を注いで書いたものであるから、確かに我が講談界に一異彩を放つであらう。

講談社

はしがき

一　この一篇は露國文豪トルストイ伯の作になつた『アンナ、カレンナ』の一部から取つたものであります。申すまでもなく伯の作では、アンナといふ女が全體の主人公でありますが、僕は態と此の主人公の方でない副主人公ともいふべきキツチイとレビンとの關係を主と致しました。

一　此の作に於て、僕はトルストイ伯の作物を皆さんに紹介しようといふのではありません。只世界の大文豪、大思想家、大宗教家、と云はれたトルストイ伯の作の或る一部に、斯ういつたやうな筋のところがある

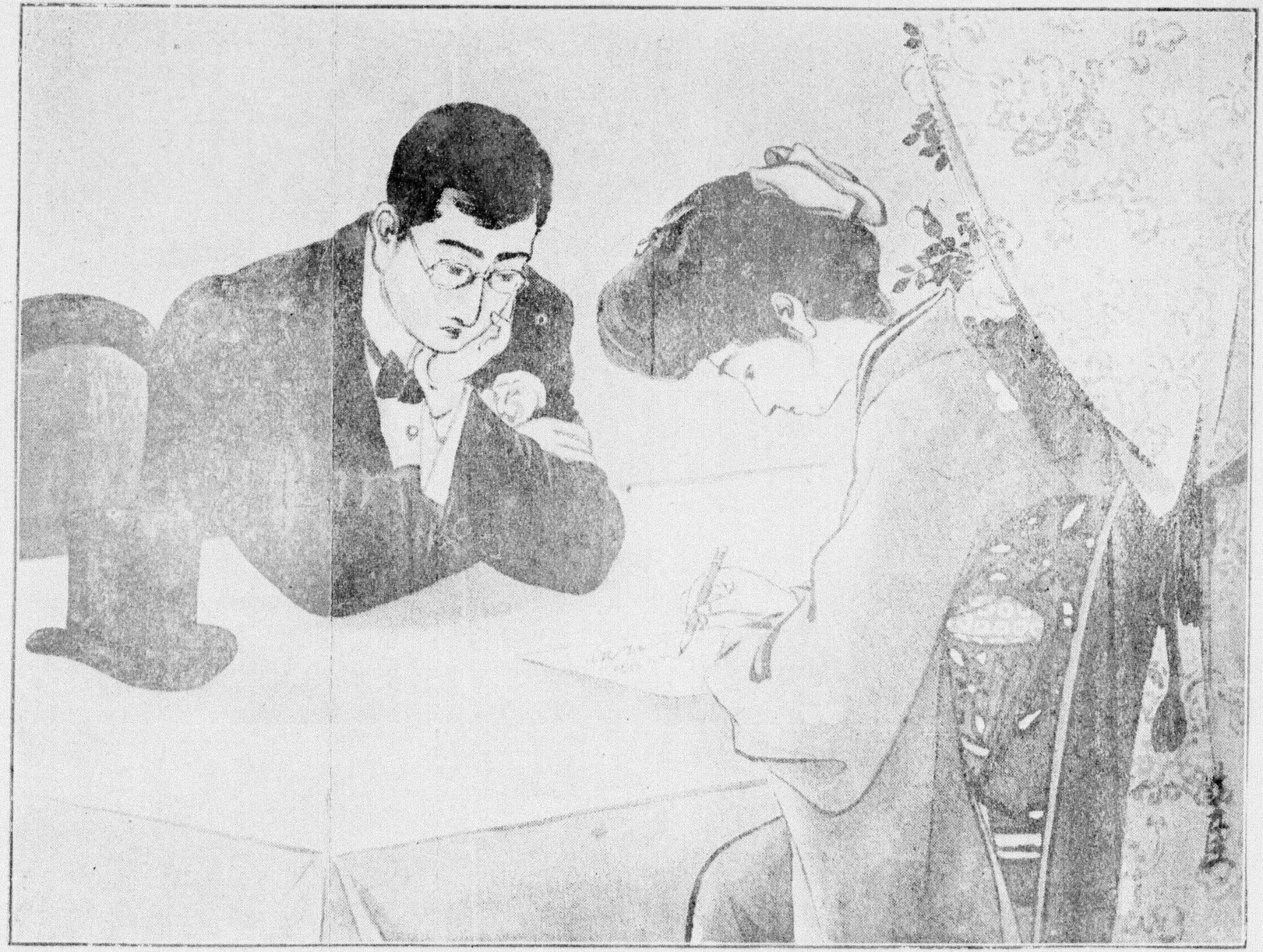
と其れだけをお知らせ積す積りで、其れだけで満足であります。

一　伯の作が斯んなものでないことは豫め御承知を願つておかねばなりませぬ。筋だけは間違ひがないと思ひます。

一　附錄として短篇を一つ添えました。これは佛國の大家モウパッサンのもので、これも譯と云ふ程のものではありません。

大正二月四月末

著者しるす



一　伯の作が斯んなものでないことは豫め御承知を願つておかねばなりませぬ。筋だけは間違ひがないと思ひます。

一　附錄として短篇を一つ添えました。これは佛國の大家モウパッサンのもので、これも譯と云ふ程のものではありません。

大正二月四月末

著者しるす

祖先の家

倉富砂邱

(一)

昨夕から降り續いた雪が眞白に積つた。瓦斯暖爐の暖い室の中から、硝子窓越しに外を見てゐると、仕掛でもしてある芝居の雪のやうに、薄暗い屋根の上邊りから、眼まぐるしいほどちら〳〵と落ちて來る。

瓦斯暖爐の室の中に、今も宿酔らしい充血した眼をして、何となく呆然した顏をしてゐるのが、此の家の主人で、大野恒春といふ分別盛りの辨護士である。夫人の鳥子との間に、初男といふ十歳になる兒を頭に、今では最う三人の親となつてゐるのに、男振りの美い、金使ひの綺麗なそれに一體がさつぱりしてゐる氣質を武器として、日となく夜となく花柳の巷に出入して、

『下町だらうと山の手だらうと、一流も二流もあるもんか、吾輩が斯うすると思つて出來ないことは一度もない』ことをもつて誇りとしてゐた。

ひと月許りも前だつたか、鳥子が何か探さねばならぬものがあつて、

恒春が留守の時に、その居間に入つて、何の氣なしに小さな手箱を開いて見ると、そこから女文字の手紙が現はれた。

豫てから、夫の放蕩に快からず思つてゐた鳥子は、屹度藝者から來た手紙に違ひない。これを證據に、一生涯頭の上らぬやうな目に遇はしてやらねばならぬと、不快よりは寧ろ勝利の直覺を得た思ひで中を讀むと驚いた——。鳥子夫人の顏は見る〳〵中に變つて來た。

手紙は、此家に雇ひ入れてある家庭教師から恒春に宛てゝ、なまめかしい文字を連ねたものであつた。

鳥子夫人は深く決する處があつて、此の手紙を懷中に入れて室を出た

金で買つて金で遊ぶ賤しい家業の女なら未だしも、自分の手から自分の家に入れてやつた家庭教師と、淫らなことをされるとは、全く一家の主婦を馬鹿にし切つた行爲である。何といふ淺間しい人の寄合だらう。

ムキになつて怒つてゐる處に、恒春は機嫌好く歸つて來た。何時も出迎へる鳥子が顏も見せぬのが、いくらか氣に懸らぬでもなかつたが、其のまゝ自分の居間に入ると、待ち構へたやうに鳥子夫人がやつて來て、

『貴郎は何といふ情けない方でせう。御自分で好くも愛素がつきませんね。』

と、證據の手紙を鼻先に突附けられて、恒春は一言もなく辛笑ひをして傍を向いた。

『一體貴郎は人の夫であるとか、小さいものゝ父親であるとかいふお考へを持つて被在るんですか。人の責任といふことを感じて被在るんですか。』

『惡かつた。僕が惡かつた。それほど責めなくても、僕自身で大いに後悔してるんだから許しておくれ。』

夫人の權幕が强くなつて來たので、恒春はピヨコ〳〵頭を下げて、見事に鳥子の前に謝罪つた。そして結局は、家庭教師を直ちに解雇して、恒春は、今後一切鳥子の外には、女に愛を注ぐやうなことは斷然しない

と契つた。

表面ひと通りの事件は、恒春の謝罪と契ひとで收まつたやうなもの丶其れでも鳥子の心は收まらない。落附かない。矢張り思ひ出せば、飽まで馬鹿にされてゐたことが口惜しくて耐らない。

『最う夫とは口もきくまい。』

かう決心して自分の居間に閉籠つて、決して扉を開けない。恒春には勿論、兒供等にも顏を見せない。用があつて呼んだ女中にさへ、辛い顏をして、今にも狂ひ出しさうな形勢を示す。乃で困つたのは恒春である毎日睦まじく打連れ立つて學校にも行き幼稚園へも通ひ、そして庭の芝生の上で無邪氣な唱歌を歌つて遊び暮した兒供が、疲れて眠るに母の腕もなく、お伽噺を聞かしてくれる母の聲もない。可愛い兒供等が、

『母さまは、母さまは。』

と、聞くたびに恒春の心は苦しみに打たれる。何とかして鳥子の心を和らげねば兒供が可哀相だ。一日過せば一日だけ罪もない兒供に濟まない譯だ。何としたら好いかと、胸を碎いた末思ひ出したは、京都に緣づいてゐる妹の安子に來てもらつて、その手から鳥子の心を和げるのが一等好い策であるといふことであつた。

其れで直ぐと安子に手紙を出して、大急ぎで來てくれるやうにと、言

葉を低くして哀願的に頼んで見ると、其れは嘸お困りでせう、私で出來ることなら何でも致しますからと、折返し承諾の返事が來た。

恒春は安子の手によつて、必ず鳥子の機嫌をなほして貰へると信じてゐる。

玄關の書生が、電報を持つて來たときは、恒春の空想が、いくらか朧氣になつた頃であつた。電報は安子が、途中から出したもので、今日午後何時に新橋に着くといふ知らせである。

（二）

時計を見ると未だ十一時である。今の中に、今日の調ぶべきものを調べておかうと、俥を急がして京橋日吉町の法律事務所に行つた。

事務室の肱掛椅子に凭れて見たが、安子が來ると云ふ安心と共に、今度は例の手紙を突附けられた時の、鳥子の顏の物凄かつたこと、自分の頭が自働的にピヨコ〳〵下つたことなどが、急に可笑くなつて來た。

道の兩側に植ゑ附けられた柳の木が、烈しい吹雪に搖れて幹まで動いてゐる。その寒い中を、傘を窄めて急ぐ女や、笑つて行く軍人や、汗を拭いて走る車夫や、種々なものゝ行き交ふ樣が、窓懸の隙間から覗かれる。

豫審調書の寫しを、強ひて落附けた頭で讀んで行く處に、來客の取次を受けた。客の名刺には、只小さく福山令次と記されてある。

『こりや珍らしい。』

恒春は子供のやうにいそ〳〵して、自ら立つて玄關に出た。

『やあ。』

『やあ、多分此方だらうと思つて來た。』

『さうか。さア上り玉へ。寒かつたらう。』

應接室に二人は並んで入つた。

『隨分久濶だつたね。』と、恒春は懷かしさうに友の顏を見る。

令次も莞爾して、大きな鰐革の葉卷入から、馨りの好いロシア卷を取出して喫ひ初める。金緣の近眼鏡をかけた、少し色の淺黑い、體格の立派な紳士である。

令次と恒春とは、高等學校在學中からの友人で、この二人と今一人、山本と云ふ陸軍少將の息子とが、最も親しく交つてゐた仲であつた。

『好く出て來られたね、何か此方に用でもあつたんかい。』

『う、少し……まあ、後で緩くり話さう。』と、令次は心持ち顏を赧くする。

『大分顏色が黑いせ。牛は何うだい、殖えたかい？』

『面白いよ、眞箇。目下動物では、牛、豚、雞の三種をやつてるんだがね、實に愉快な事業だ。それに植物が梨と茶が重で、他に桃とか密柑とか種々やつてるが、君、權利だの義務だのつて騒いでるよりは、何の位ゐ面白いか知れアしないよ。』

一體令次の話し振りは、巧みに抑揚を用ゐて、自分の云ふことを飽くまでも對手の頭に浸込まさうと努める。而して話しの間々に、恍とりと夢でも見てゐるやうな眼附をして、僅かに頸を傾げて考へ込む態をするのが癖である。

令次は早く兩親と分れて了つて、大學を卒業と、俄かに紳士生活の群に入らうとする友を尻目にかけて、自分は田舎の實家に逃げるやうに歸つた。令次の實家は、京都と奈良との間、宇治に程近い村の地主で、澤山な山林田畑を有してゐる。

令次は獨身で此の大きな土地の所有者となり、數十人の作男を使つて盛んに田園生活を營んでゐる。そして暇さへあれば、古い友人を訪ね廻つて旅行をするのを、唯一の樂しみとしてゐる。

『どうだい、今寒い思ひをして來た處に、又寒い處へ引張り出しては氣の毒だが、何處か近處へ行つて飯でも喰はうか。丁度午頃だ。』

『好いだらう。そしてぽつ〳〵と例に依て君の艶聞でも拜聽するかな。』

『大變な艶聞があるんだ。生命に關はらうと云ふ大艶聞だ。』

『相變らず盛んだらう。何をやつたつて好いさ、好いけれども、只常軌を逸しないだけの注意は必要だね。例へば、自己の歡樂のために、家庭に迷惑をかけるとか、周圍に災を起させるとか。そんなことさへなければ、遊興は罪でも害でもないと思ふ。』

『稀には脫線するも面白いよ。』

『其りやいかん。脫線しなくても、其れ以上の快樂は求めることが出來るんだ。早い話しが、君は酒に飮まれたり、女に惚れさしたりして無上の樂みを求めてゐるし、僕は田舍で百姓をして、豚が殖えたり馬の子が產れたり、又は桃が實つたり、梨の花が咲いたりするのをもつて、第一の快樂としてゐる。快樂も苦痛も比較的のものだからね。』

『それで何うといふんだ。斷案のない議論ぢやないか。』

『斷案は先に云つてあるぢやないか。詰り常軌を逸しなくとも、快樂を進めて行くことは出來ると云ふんだ。』

『然うか、分つたよ。』

恒春は議論なんか面倒臭いと云つた風に、直ぐに相手になるのを止して了つて、只譯もなく二人は顏を見合せて微笑んだ。

令次は不意に思ひ出したやうに、

『喜智子さんは何うしてゐられるだらう。矢張り未だ實家にゐられるだらうか。』

『ゐるとも、今日は明治座へ行くとか云つてゐた。』

『芝居も斯う寒くつちや厭だね。』

『けれども酒を飲むのは寒くつても好いよ。さあ出かけやう。實は今日は午後にお迎ひに行かねばならないんだ。』

『然うか。お客さんかね。』

『客つたつて、京都へ行つてる僕の妹だ。』

『お妹さんがゐられることは、昔から聞いてたが、京都にゐられるとは知らなかつた。ぢや僕の家とは隣り合も同じだ。』

『全くだ。好い機會だ。今度は一つ會つてくれ給へ。亭主は眞宗の僧侶で、眞面目一方な好人物だよ。暇の時は訪ねてくれ給へ。どんなに喜ぶか知れない。』

『僕は妙に又お寺が好きだよ。お寺の空氣が好きだよ。是非紹介してくれ給へ。』

恒春は立上つて、

『酒でも飲んで緩くり話さうよ。』

(三)

一度小止みになつた雪が、夕方近くなると又勢ひこんで降り出した。廣い新橋驛の構内は、時折風に誘はれた雪が吹込んで來て、瀧車の屋根も、軌道の附近も、何處も一面眞白になつた。

深夜のやうに物淋しい。

列車の着くまで、恒春は待合室へ入いつて待つてゐやうと、丁度入口まで來たとき、ヒヨツコリ中から出て來た一人の青年士官がある。田邊と云ふ近衛の砲兵中尉で、軍人には不似合な好男子、キリツとした顏態に

情の深さうな二重瞼、いくらか反身になつた軍服姿に、人を魅するやうなところがある。

恒春は最初、此の男と鳥子の實家の山本で會つてから、二三度恒春の家をも訪ねてくれたことがある。

『何處へかお出でになる處ですか。』

二人は暖爐の前で話し出す。

『否、迎ひに來たんです。』

『然うですか。私も迎ひに來た處です。』

『誰方かお歸りですか。』

『え。母が來る筈ですから。』

『名古屋からお歸りですか。』

『然うです。貴方の方は？』

『僕の方は妹です、京都の。』

『ぢや同じ列車ですね。』

『然うですね。』

入口の邊をウロ〳〵してゐた馭者が、辛と田邊を探し出して、何か風呂敷に包んだものを渡した。

田邊は祖父が維新の勳功によつて、男爵を授けられた。最う三十と云ふ年だが、大尉になるまでは妻は娶らぬと云つて未だ獨身でゐる。

『最う着く頃でせう。』と、恒春は時計を出して見る。

『音がして來たやうですね。』

列車は屋根に白い雪を載せて、徐々と近づいて來た。

何處に乘つてゐるのかと、二人は各々窓の中を眺めてゐると、丁度直ぐその前に一等車が停つて、

『まア態々此の寒いのに被入て下すつたの。』と、安子は美くしい顏を出した。

田邊は安子を見ると、强い力で引附けられるやうな氣がして、直ぐに

恒春の妹だと知つた。

安子は二十八で、六歳になる豊雄の母であるが、何うしても廿四五としか見えない。品の備はつた、落着きのある女である。

安子の横に坐つてゐた老婦人が、田邊の母で、安子とは此の瀧車の中で恰で母子のやうに親しくなつた。

恒春が、妹に田邊を紹介すると。

『最う貴方のことは、お生れなすつた頃のことから、全然お母さまに伺ひましたわ。』と、微笑む。

田邊は恒春を母に紹介した。

『何と云ふ不思議な御縁でしたらうね。』と、老人は呆れたやうに云ふ。

恒春は、この老婦人が名古屋の別邸で暮してゐることを知つてゐるので、

『今度は暫時位ゐ東京に御逗留で被在いますか。』

『一月位ゐ居ります心算でまゐりましたが……。』

プラットホームを出ると、其處には二頭立の馬車が横附けになつて待つてゐる。田邊は母と其れに乗つた。後から荷物が一臺と、附添の女中が二人と、三臺の俥が跟いて行く。

安子は女中に持たせた肩掛を取つて頸に巻いた。

『兄さん。何うなすつたの。』

『憤つてるよ。困つ了つた。』

『當前だわ。』と、鳩のやうな眼で睨む眞似をする。

『何にしても、然う何時までも怒つてゐらつしちや、兄さんだつて全く〳〵お困りだわね。』

『鳥が始終鬱いでるもんだから、子供まで活氣が失せたよ。』

『でも初男も君子も、皆壯健でせうね。』

『壯健ではゐるが……、鳥が憤つてるよりは子供の萎れてるのが可哀さうでね、眞箇。』

『全くですね。義姉さんも又何うして然う何時までも怒つてらつしやるんでせう。』

『何にしても早く機嫌の直るやうにしておくれよ。』

『直りますとも。私がお目にさへかゝれば、今晩一晩で直して見せますわ。』

不意と後ろから、地を磨る劍の音が聞えて來ると、安子は田邊が來たと思つて胸を騒がした。而して直ぐに其の思ひが電光のやうに消えて、見たこともない顏の黑い軍人が側を通つて行くと、何うして田邊が來るやうな氣がしたのだらうと、我れながら不思議に怪まれた。

（四）

日露の戰役で死んだ鳥子の兄があつた。これが恒春と令次との親しい友人であつた。

そこで令次は規則のやうに、土曜の午後から日曜にかけて、何時もこの男の家で遊んでゐた中、其處の兩親や三人の娘などゝも遠慮のない仲となつて、一緒の食卓で飯を喰ふやら、一緒に芝居を觀に行くやら、恰で家族同樣になつてゐた。

令次は最初鳥子を戀した。折もあらば自分の意中を打明けやうと思つてゐる矢先、恒春に先んぜられて、鳥子は到頭、未だ恒春が角帽を冠つてゐる頃その妻となつた。令次は一時人知れず失望の胸を痛めたが、間もなく今度は鳥子の妹を慕ひ初めた。そして此の思ひが段々と募つて來た處に不幸な令次は、又もやこの女を、さる外交官に奪はれて了つて、最後に三度、その又妹の喜智子を戀するやうになつた。時々彼が上京して山本を訪ふのも、全く喜智子に會ひたい爲めであつて、今度突然やつて來たのもこの目的に外ならぬ。

令次も今度は深く決してゐるものがある。

今日喜智子が明治座に行つてゐると聞いた令次は、恒春と分れて一先

づ旅館につき、此處で夕飯を喰つて明治座に急いだ。

喜智子の父は後備陸軍少將で、山本海三と云へば、日清戰爭の時、一身に譽れを荷うた英雄である。義太夫と芝居とが唯一の好きで、夫人の留子や喜智子を連れて、氣に入れば毎日でも出かけて行く。

令次が茶屋の男に連れられて、二階に上ると、右手の棧敷に海三の禿げた頭を見出した。喜智子は母の横に座つて、白い鹽瀨の手巾で涙を拭いてゐた。

令次の顏を見て、最初に聲をかけたのは海三である。

『福山君が來た。よく探し出したね。』

喜智子の側に少し許りの空いた席があることが分ると、令次は最う顏の赧くなるのを感じた。

『喜智の横が空いてる。彼處に座り給へ。』

喜智子は座を分けて、

『福山さん此處に入れますよ。』

令次は嬉しさが胸一杯で、手足も聲も顫へてゐる。

『失敬します。』

座つて更めて留子と喜智子とに挨拶した。

喜智子は手づから茶を酌んでくれ、婢に命じて家から持つて來た菓子

を進めた。

強いて落着いて茶を飲み、煙草を靜かに吹かして氣を鎭めた。

『福山君。實に珍らしいな、何時來ました。』

『今日——午後に着きました。』

『屹度大野の義兄さんにお會ひなすつたでせう。』と、賢こさうに喜智子が云ふ。

『新橋に着きますと、直ぐに大野君を事務所に尋ねまして、其れで貴方が此處に被在ると云ふことを聞いて來たんです。』

令次は海三に期う云つて、密と喜智子の樣子を窺つた。それを留子が

瞥と見て、冷笑するやうな笑を、輕く唇頭に現はした。

留子は何う云ふものか、以前から令次を快く思つてゐない。海三が恒春にも增して令次を待遇するのを、何時も不快に思つてゐる。令次は夙から其れを知つてゐるが、胸に一物ある彼は、努めて此方から留子に親しむやうにして、假ひ內心では何う思つてゐても、表面だけでは令次に向つて冷淡なことの出來ないやうにと警戒してゐた。

令次は、

『僕が此處に來たときは、喜智子さんは泣いてましたね。』

『私、何時も涙が出て仕樣がございませんの。極りが惡いと思ひますけ

れど、直ぐに涙が出るんですもの。』

『喜智は何時でも、芝居さへ見れば翌日まで頭痛がすると云ふんだよ。』

と、海三は娘を見て、白くなつた長い髯の奥に、唇が赤く動いて笑ふ。

煙と埃との立舞ふ中を、結ひ立ての髪を見せやうとする女、着物の色合を誇らうとする娘などが、浮々した氣持で、用を拵へては人の中を押分けて通る。大きな口を開けて物を喰ふもの。渇したやうに麥酒を飲むもの、笑ふもの、肩を打ち合ふもの、此處には割合に人の世の淺間しい樣が現はされる。そして母は娘の前で、娘は母の前で、妻も夫も、人の慾の溢れやうとするのを隱さうともしないらしい。

令次は辛と心も落着き、氣も鎭つて、喜智子と無邪氣な世間話しを初めた。

留子は初め一通りの挨拶をしたゞけで、令次とは口も利かず、冷淡な六かしい顏をしてゐる。

靜かな三味の音に連れて幕が開いた。

(五)

令次には一人の異母兄がある。令次とは七八歲上の彼是四十近い男であるが、十四五年前に、相續權を令次に讓つて漂然と家を出た。

一體が少年の時分から變つた男で、富豪とか地主とかを猛烈に罵倒して、密かに家の金を盜み出しては、貧しい小作人などにくれて喜んでゐた。令次にも滅多に音信もしないので、何處で何をしてゐるか更に便りがなかつたが、其後餘程の年月を經てから、社會主義者の群に入つてゐると云ふやうなことが知れた。と、間もなく今度は支那に渡つて日本から武器の密輸入をなしてゐると云ふやうな噂を聞いた。

四五年前であつたが、福山精が治安妨害と云ふことで、長崎の警察に捕へられたと云ふ新聞記事を見て、令次は非常に驚いて心配した。が、然し其れは直きに放免になつた。其れから一年も經つた頃は、九州の或る小さな新聞社に入つたが、此處で富豪は國賊なりと云ふやうな大論文を掲げた爲め、その新聞は發行停止を食つて精は退社して了つた。それから、放浪の旅に出て今では東京で救世軍に入つてゐる。

と聞いた令次は、今度東京に行つたら、一度兄を訪ねて見たいと思つて、前から所有る方面に手を伸ばして兄の住所を探つてゐたが、漸く出立間際になつて通知してくれる人があつた。

それで、喜智子と會つた翌日の午後、敎へてくれた家を尋ね廻つて行くと、二三日前に越したと云ふ。

令次は差配の家を習つて、其處で再び引越先を聞いて、赤坂の裏二丁

目へ行つて探して見た。

不潔らしい家の並んだ町で、駄菓子屋とかあら物屋とかゞ、間口の狭い薄暗い店を出してゐる。令次は、精進あげと、筆太に書いた油の臭ひの籠つてゐる店先で、この直ぐ先の路次を入つた處だと教へられた。

人の身軀も横にせねば通れないやうな路次の、壁と壁との狭い間を潜つて行くと、大きな土藏が一つ兀然として控へてゐる。その裏手に古い軒の低い家が四五軒並んでゐて、其の取附の家に、福山と云ふ小さな表札が掛つてゐた。

『兄は斯様家に住んでるのだらうか。』と思ふと、令次は泣きたいやうな氣がした。

少時其處に突立つてゐたが、家内には人のゐる氣勢もない。崩れかゝつた格子の中には泥塗れになつた靴が、半ば乾いたまゝおかれてある。それからその側には、少し不釣合な竹の根の綺麗に磨き上げたステッキが、投り出されたやうに横つたはつてゐる。

令次は靜かに案内を乞うた。

出て來たのは四十を越した醜い女で、迂散らしく突立つたまゝ令次の立派な態を見てゐる。

名刺を出した。

『鳥渡お待ち下さいまし。』

今の女は何だらう。下女を使つてるのだらうか！然し人を使ふことの嫌ひだつた兄――家にゐたときだつて、嘗て一度も人を使つて用をさせたことのなかつた兄が、眞逆に人を使つてゐやうとも思はれない……。

開閉のたんびに倒れさうになる唐紙を開けて現はれて來たのが、令次の兄の精である。蓬々と頭の毛は肩まで垂らして、日に燒けた赤銅色の顔、可怖しいやうに光つてゐる眼、二十何貫あらうと思はれる肥えた身軀――令次が頭の中に殘つてゐた兄の樣子は、何處にも見出すことは出來なかつた。

『お上んなさい。』

冷然たる調子。令次は意外だつた。

玄關は二疊、唐紙を開けると六疊、只この二間だけの家で、疊は磨り切れて了つて、一度日光に當てたらバラ〳〵にならうと思はれた。六疊の隅に机をおいて、社會主義論の飜譯書とか、勞働問題、統計學と云つたやうな書物が載せてある。そしてデーが忍ばせてある。

令次は何と云ふことも出來なくて、只兄の變つた顏をしげ〳〵と眺めた。殆ど十五年振りに會て、今此處に對ひ合つて坐つてるのだ、と斯う

思ふと、令次は急に胸が迫つた。

『兄さん……御機嫌好う！』

精は只、

『あゝ。』と云つた限り、先刻の女が出した澁茶を啜つた。

『貴郎お煙草を召喫りますか。』

『は……いゝえ。』

令次は此の兄の前で、ロシア巻の臭ひをさせるのが濟まないやうな氣がして、喫はないと云つた。

『私は今勞働問題を研究してるがね。』と、精は二杯目の茶を啜つて、熾

んな勢ひで勞働問題を論じ出した。いろ〳〵と錯雜した話しの要は、人間は働いてそれだけの報酬を得、その報酬で生活して行くべきである。他の得たる——假へば父とか祖父とか乃至昔の先祖などが得たる報酬を貰つて、それで自己の生活を助け、又はより好くしようとするのは間違つてゐる。徹頭徹尾人は働いて、それだけの報酬で生活せねばならぬと云ふことである。それから或ひは財産世襲の弊を說き、現今の內閣の橫暴を罵り、約一時間に亘つて論ずるのを、令次は默つて聞いてゐた。

精には弟と會つて嬉しいと云ふやうな樣子は少しも見えない。令次の身については何一つ問ひもしない。

妙な女は炬燵に入つて居眠りをしてゐた。

令次は歸るとき、餘程金をおいて行かうかと思つたが、若し兄が怒るやうなことでもあつてはと、五圓紙幣一枚白紙に包んで、

『土産物も持つてまゐりませんで。』と、差出すと、

『何です！』

精は白紙を開いて見て、

『金かね。頂戴しとかう。』と、その儘袂に入れた。

令次が立上つた音に眼を醒まして、女は炬燵から出て來た。

兄も女も、令次を玄關まで見送つて來た。

令次は外へ出ると、初めて夢から覺めたやうな氣がした。そして振返つて兄の家を見た。

『彼れで愉快だらうか！如何して、自分で滿足してるだらうか？』

『あの女は何だらうか！無教育者らしい……確かに兄貴よりは年を老つてる……。』

こんな思ひが、深い意味でもあるやうに令次の頭に湧いて來た。

俥に乘つて宿に歸る間も、此の疑問を續けてゐたが、何時とはなしに心は喜智子の上に走つて『昨夜の嬉しかつたこと、今夜海三に招待を受けてゐること、などを思ひ出して何時か心もそわ〳〵するやうに覺えた。

『今度は是非とも喜智子との結婚を決めて歸らねばならぬ。』

令次は喜智子と結婚してからの家庭を想像して、

『俺達の造る家庭は、滿足の笑と自由の愛とがある許りで、猜疑とか嫉妬とか云ふものは決してないのだ。』

獨りホク〳〵悦んで宿に着いた。

（六）

安子は昨夜一晩かゝつて鳥子を慰め、兄の爲めに以前の平和な樂しい家庭に返つてくれと、泣きつ賺しつして詫びた。

『何うして二度と再び私が夫を愛することが出來ませう。』と、鳥子は顏から手巾を離す暇もなく、涙の中に恒春の無情と無節操とを訴へた。

『其んなことを仰しやつて、義姉さんは何うなさるお心算ですの。』

『私兒供さへゐなきア、寧そ……。』

『義姉さん、其樣ことを仰しやるものぢやありませんよ。兄も今では心底から後悔してゐるぢやありませんか。』

安子は本當に兄が後悔してゐること、以前の夫婦の仲が、人に笑はれる程濃厚であつたこと、兄は誰に向つても鳥子を賞めてゐたこと、なほ世の母の最も弱點であるところの、可愛い兒供の行末を思はせて、搔口

說き〳〵說いた。

鳥子は何と思つたものか、翌朝になると、何時になくニコ〳〵して、

『安子さん、私貴女に會つて斯んなに嬉しいことはありませんわ。貴女と一緒にゐると、苦勞も心配も失くなつて了ひますよ。』と、晴々した眼附で物語つた。

さては鳥子の心も柔らいだかと、安子は言葉の調子が變る程喜んだ。

『義姉さん、まア此方に被來つて、皆でお茶でも頂かうではありませんか。』と、安子は鳥子を連れて兄の書齋に入り、鳥子を恒春の側に坐らせて、自分が茶を淹れたり菓子を出したりした。

一時間も一緒に話した。斯様ことは怪しく思はれるまで珍らしいことである。

鳥子が去つてから、

『兄さん、愈々義姉さんの御機嫌が直りましたよ。これから兄さんが優しくさへして下されば、屹度もと〳〵通りの優しい義姉さんとなつて下さると思ひますわ。ね兄さん、私には何う云ふお禮をして下さるの。』

『あゝ梅雨が晴れたやうな心地だ。これも全く安さんのお蔭だよ。如何お禮でもする。』と、恒春は快活さうな口調である。

『でも私、昨夜は隨分と骨が折れてよ。口惜しい〳〵と義姉さんが泣く

のでせう。私も義姉さんのお心中を察して泣いたわ。兄さん、本當に後生ですからね、これから屹度眞面目な生涯に入つて頂戴よ。今後、若しも又兄さんが不品行なことでもなすつたら、其の時は私最う知りませんよ。斯樣ことが二度もあれば、義姉さんだつて如何ことをなさるか知れませんわ。』

『安さん。お前は今日までの僕の行爲を知つてゐるから、僕の云ふことも信じてくれないかも知れないが、屹度眞面目になるよ。そりや昨日も安さんに誓つた通り、最う決して鳥子を怒らすやうなことはしない。』

『本當に誓つて下さるわね。』

『大丈夫。これで凝々だ。』

斯樣話しが續いてから、

『私今日山本へ行つて來たいと思ひますが、兄さんも義姉さんと一緒に被來いませんか。』

『僕……僕今日は少し困るね。』

『然う、私最う二三日したら歸らなきアなりませんから。』

『行つてお出でよ。』

『喜智子さんにも會ひたいし……。』

『喜智子つて云や、昨日停車場で會つた男ね、彼の田邊て云ふ軍人。』

『え。その方が何うかなさいましたか。』

『多分だがね、あの男が喜智子の夫になりさうな雲行だよ。』

『まア……然うですか。彼の田邊さんと喜智子さんと？兄さん本當ですか。』

『田邊は余程喜智子に思召しがあるやうだし、それに山本のお母さんが馬鹿に田邊が好きと來てるんだ。』

『彼の方なら喜智子さんだつて幸福ですわね。田邊さんのお母樣も實に好い方よ。でも田邊さんの爲めには、これまで隨分と苦勞をなすつたつてね。でも今日では、先づ〳〵何うやう一人前の軍人になりさうだから

つて、田邊さんの自慢話し許しゝて喜んで被居たんですの。』

『多分成立つだらうよ。僕も田邊ならば恥かしいことはない、何も爵位を云ふのではないが、人物としても喜智子の良人として不滿な處は認めない。寧ろ過ぎてるかも知れないと思ふ。』

『私田邊さんて未だ鳥渡會つた位ゐだから何だけど、見たところ男らしい、何處となく英勇らしい點があると思ひますわ。彼の方だつたら屹度お優しいわ。』

『甚く惚れ込んだものだね。それぢやお前が嫁つちや何うだ。僕が媒介の勞を取つてやつても可いよ。』

『戯談仰有いよ、兄さん。』と、眞になる。

『然し、然うしたらお前實際幸福だぜ。田邊て好い人だよ！田邊のお母さんも……。』

『憚り樣ですけど、私には日本の憲法が認めた夫がありますよ。』

『おや、こりや失敬、お前は人の妻だつたね。』

愚にも附かぬことを云つて笑つてゐる處に、初男と君子とが走つて來て、行きなり安子の肩に凭れかゝるやら、膝に乘るやらする。

『伯母さま、僕ね、今お庭の石燈籠を寫生したよ。見せて上げようか、え、伯母さま。』

『伯母さま、私ね、ね伯母さま、毬を買つて來たのよ。伯母さま、毬唄を知つてゝ？』

『何だい毬唄なんて、彼樣もの何が面白いんだ。』

『面白いことよ、ねえ伯母さま。私ね、十とやまで、皆知つてるのよ。唄つて見ませうか、え、ね伯母さま。』

『止せ〳〵、毬唄なんか。伯母さま、僕伯母さまの肖像畫を畫いて上げようか。』

『伯母さま、伯母さまつたら伯母さま、ねえ伯母さま……。』

『ホ、、、、、、伯母さまは聾になつて了ひますよ。』

恒春は莞爾して兒供の話しを聞いてゐる。

（七）

喜智子は窓掛を開いて、午後の日光の差し込む窓際の机に片肱を突いて、何處を的ともなく眼を見開いて凝視てゐる。

机にはオリーブ色の机掛が掛けてあつて、左の隅に美しい肱突がおかれ、右の方の硯箱と並んで、厚い寫眞帳が、一青年士官の半身を見せて開かれてある。

『私何うしたら可いのか知ら。彼の人は如彼だけれど……でも私は……

……。』

かう呟いて喜智子はその寫眞を見た。

寫眞の主は田邊宇六で、喜智子の乞ひに任せて與へたものである。

喜智子は凝と其れを見てゐたが、自然と其の頰は熱して、優しい微笑が可愛い女の唇を侵した。喜智子は田邊に戀してゐるのだ。然しこの微笑は忽ちにして消え去つて、次の瞬間に喜智子の心を亂したのは、令次が喜智子に對する烈しい戀である。喜智子は令次の心を知つて悶えてゐる。昨夜碌々眠りもせずに考へたのも、兩頭の蛇をして素直に進ましめやうとすることであつた。

『何うしたら可いのだらう？私は福山さんの申出――もしも其様ことがあつたとき――を却けることが出來るだらうか。出來ないと云つても詮ない。自分の心にもないことを云ふことは出來ないもの。私が戀しいと思つてる方は……　なんだもの。福山さんが其様にまで思つて下さるのは、私には嬉しいことには違ひはないが、然し私は福山さんと結婚することは迚も出來ない。』

喜智子の眼は若々しい愛と希望との光りに輝いた。而して自分にも氣味の悪いほど、心臟の皷動が烈しく打つ。

『然うだ！私は斷然福山さんのお言葉は拒絶しなくてはならぬ。其れが私の眞實の心だ、私には人を僞ると云ふことは出來ない！』

喜智子は斯う思つて、もしも令次が自分に何かの要求をするやうな塲合には、直ちに其塲で斷らうと決心した。

『まア、喜智子さんのお室は暖かいこと。』

と、快活な語調で云つて入つた來た安子は、直ぐに寫眞帳を見附けて、

『おや！お樂しみ、ホ、、、、。』

『あら……。』

喜智子はサツと赧くなつて、田邊の寫眞を伏せて了つた。

『喜智子さん、其んなにお隱しなさらなくても、私何も彼も知つてます

よ。』

『まア……。何でもないんですもの。』と云つて、益々赧くなる。

『喜智子さん、私昨日お目に掛りましたわ。』

『誰方と？』

『田邊男爵とよ。』

『然う？何處でお會ひなすつたの？』

『停車場で。』と、田邊の母と同車したことから、停車場で會つたことまで委しく話して、

『兄から悉皆聞きましたわ。でも彼の方は本當に好い方だと思ひますわ男らしい、しつとりした、如何にも貴公子然としてらつしやるわね。』

喜智子は自分の戀人を賞められて、その嬉しさは袖にも包みかねた風情に見えた。

『兄はね、若し愈々さうとなつたら、喜智子さんの爲めに如何に幸福だらうつてね、一日も早く二人が手を取り合つて歩く樣子が見たいと云つてるんですよ。私も彼の方なら、本當に喜智子さんの爲めに嬉しく思ひますわ。』

『まア義兄さんつたら、其樣ことを仰有つて？だつて私……何うなるんだか分りもしないのに……。』

『大丈夫ですよ。屹度貴女の思ひは遂げられますわ。』

窓の光線が次第に薄らいで、空氣の冷たくなつたのが感じられる。喜智子は立つて窓掛を引いた。

『安子さんは何日まで東京に被在して？』

『私明後日頃に歸りたいと思つてますの。喜智子さんが一緒に被來ると可いけれどね。冬の京都も又捨て難い處があつてよ。清水や圓山の雪景色も大變好いのよ。』

『私行きたいけどね……。』

『でも戀しい方と同じ土地に住んでゐたいのは人情ですからね。』

『其樣こともありませんけれど……。』と、我れ知らず大膽に出た。

電燈が點くと間もなく令次が訪ねて來た。

令次は先づ喜智子が何處にゐるかと見廻したが、眼の届く處にはゐさうになかつた。

海三は咳をしながら令次を導いて座敷に入つた。

話しは令次の田園生活に移つて、海三は話し上手の令次に引附けられて、廣々とした果樹園だの、整頓した牛小舍だの、手入の行届いた雞舍だのが眼に見るやうで、

『是非一度行きたいと思つてますが。』と、海三は令次の境遇を羨ましく

思つた。

安子と喜智子とは、留子に連れられて座敷に來た。

令次は喜智子の顏を見ると、言葉も亂れるまで心臟が騷いだ。何と挨拶したか自分でも分らない。眼は朦朧となつてゐるが、耳は非常に銳くなつて、喜智子の呼吸の音までが聞えるやうに思はれた。

晩餐が運ばれて、令次は久し振りに山本の家族と飯を喰つた。恰で夢のやうで、自分の身體が疑はれるやうであつた。

食後の話しも令次が中心となつて、其の顏は常に海三の方に向けられてゐた。

喜智子と安子とが座を去つてから少時すると、令次も亦山本夫婦の前を立つた。後で留子は夫に向つて、

『福山さんは屹度喜智に何とか思つてますよ。』と云ふ。

『思つてるだうう。福山さへ異存がなければ、私は喜智を妻に遣つても可いと思つてるんぢや。』

留子は吃驚したやうに慌てゝ、

『其りや不可ません。所夫は些とも娘の心を御存じないから其んなことを仰しやるんです。』

『田邊かね。いや私は田邊よりは福山の方が確手してると思ふ。男と云

ふものは福山のやうでなくちや駄目だ。田邊も成程取るべき點はある。然し私の鑑定を以つてすれば、田邊は福山と比ぶべき人物ではない。』

『私は喜智の夫とすべき人は、田邊さん一人だと思ひますわ。容貌と云ひ地位と云ひ財産と云ひ、決して世間に對して恥づるやうなことはないと思ひます。第一福山さんは何です、其りや財産は如何に多いか知りませんが、たかが田舍の百姓ぢやありませんか。』

『其れが何うしたんだ。構つたことはないぢやないか。』

『さうは行きませんよ。爵位など何うでも可いとは申しますものゝ、百姓よりは華族の方が可いぢやありませんか。』

『ハヽヽヽ詮樣のないことを云ふ人だ。華族が其樣に有難いものだらうか。』

『だつて、百姓よりは可いぢやありませんか。』

『百姓つてお前、福山の田園生活は決して世の所謂百姓ぢやない。お前が想つてるやうな百姓とは違ふ。私は實に福山の事業を愉快に思ふよ。出でゝは果樹を栽培し、入りては牛豚を養ふ、羨しい境遇ぢやないか。喜智なんかに然う云ふ事業を手傳はすのは實に適當なことで、身軀なんかだつて如何に壯健になるか知れない。』

『喜智に其樣ことが出來るものですか。』

『何有、夫婦して手に土を摑んだり、豚の寐床を担へてやつたり、其様ことをするのぢやないよ。その爲めに數十人の男や女を使つてるんだもの、只その指揮をすれば可いんだ。福山なんかに聞いて御覽、果樹とか牛豚とか養雞などに關する智識の豊富なこと、實に驚くの外はない。』

海三は色々と留子を説いたが、然し二人の心が一致することは出來なかつた。留子は地位とか爵位とかを唯一の楯として、夫の言葉に反抗した。そして飽くまで喜智子の夫は田邊をおいて外にはないと言張つた。

(八)

喜智子が獨りゐると知つた令次は、思ひ切つて其の室に入つた。彼が顔は輝き、強いて落着けやうとする態度は、特更に心の亂れを示してゐる。

喜智子は令次を見ると頸を垂れて、微かな吐息をさへ吐いた。

『僕は貴女がお一人で被在ることを知つて來ました。』と、喜智子の側に坐つて、熱い程熾つてゐる火鉢の縁に手をおいた。

『もう直きにお母さんがまゐりますから。安子さんも……。』

喜智子は豫期してゐる令次の申出を思つて聲が顫へた。自分が何を云つたか、それを考へることも出來ず、令次の顔を見上げることも出來な

かつた。

『然うですか？』と、靜かに云つて、自分の心の思ひを、何うして云ひ出して可いかと迷つてゐる。

『福山さんは何時まで東京に被在いますの？』

『何時までゐられるか僕には分らないんです……貴女次第で……。』

喜智子は眠りでもするやうに垂頂れて了つて、これも亦何と令次に對して云つたら可いかと、心の中は暴風のやうに亂れてゐる。

『僕が永らく逗留してゐるか、それとも今夜にでも東京の地を去らねばならぬか、それは皆貴女次第で……す。僕が今度上京して來ましたのも……然し喜智子さん、貴女最う察して下すつたでせう。』

『察しるて……私何も……。』

『僕が貴女に云はうとすることは、最う分つて被在るでせう？僕の心は察して被在るのぢやありませんか。』

『私には些とも……何だか……。』

『喜智子さん、ぢや僕……怒つて下すつちや困りますよ。僕貴女に、一生田園生活をして頂きたいと思ひますが……僕の妻となつて僕の事業を……。』と、後の方は呟くやうに云つて、それから後は消えて了つた。

喜智子は頭を上げることは出來なかつた。胸には嬉しい思ひ——若い女の誇りを覺えて、福山夫人となつて、草深き田舍で平和な一生を送ることの幸福を思つた。喜智子は決して令次を憎い人とは思つてゐない、過ぎし過去のページを繰つて見ると、戀しいと思つた日もあつた。

然しこの思ひは田邊を思ひ出すと同時に、ガラリと變つて了つて、喜智子は躊躇ひながら、

『福山さん……私のことは最う忘れて下さいまし。』

『え？』と、令次は押壓されでもしたやうに感じて、激した語調で、

『出來ないと仰有るんですか。肯いてはくれないと仰有るんですか。喜

智子さん、これは僕の運命に關することですから、何卒明瞭と仰有つて下さい！』

喜智子はハラ〳〵と涙を落した。

『何卒……私のことは……。』

『忘れてくれと仰有るんですか？分りました！あゝそれで僕の運命は決せられました。』と、太息を吐いて、

『何うも失敬しました。』

令次は斯う云つて室を出た。

入違ひに留子が來て、机の上に突伏してゐる娘の樣子を見た。

『あッ屹度然うだ。』

留子は喜智子の様子と、今瞥と其の後姿を見た令次の態度とで、如何ことが起つたのかを察した。

『まア好かつた！』

と、斯う思つて、

『喜智子……。』

喜智子は母の聲に驚いて顔を上げた。留子は何うしたかと問ひもしないで、

『何ですよ、斯様とこに入つて。さア皆さんの處にお出でなさい。』

『直きにまゐりますから……。』

喜智子は鏡を出して涙の跡を直し、母と共に座敷へ行つた。其處には華やかな電燈が葡萄の房のやうに點いてゐて、海三は安子と令次とに快活な會話を交へてゐた。

喜智子が入つて來たのを見ても、令次の顔には何の變化も起らなかつた。最う彼は斷念したのであらうか。

『今夜少し外に廻る處がありますから。』と、令次が歸らうとしたとき、女中が田邊の來たことを知らせた。

『此處へお通し申せ。』と、海三は令次に向つて、

「君まア待ち玉へ。今一人の紳士を紹介するから。」

再び令次が座に就いたとき、軍服を着けた田邊中尉が笑顔を以つて入つて來た。

「おや、奥さんも來て被在るんですか。」と、莞爾して安子に云つた。

喜智子は赧い顔をして垂頭いてゐた。

海三は田邊と令次とを紹介した。二人は互ひに名刺の交換をして、親しく言葉を交はした。

「僕は川岸さんの奥さん(安子のこと)を主賓として、明晩加留多會をしたいと思ひますが、皆さんにお出でが願はれませうか。」と、田邊は一同を見廻して云つた。

「加留多會ですつて？私は必ずまゐりますわ。」

安子が第一に賛成した。蓋し安子は、京都の貴婦人社會では二と下らぬ加留多の達人で、内々東京で一つ自分の腕を示したいと思つてゐた處なので。

「私もまゐりませう。喜智子もお出でゞせうね？」と、留子が謎でもかけるやうな眼をして娘を見る。

「まゐります。」

斯う云つて偸むやうに田邊を見た。而して男の視線と合すると、莞爾

して垂頭いて了つた。

先刻から田邊の樣子に眼も離さずにゐた令次は、此に至つて巖の間にでも挾まつたやうな感じがした。此處に座つてゐるに耐えられないと思つて、急いで山本の家を辭し去つた。殆ど何もかも夢中である。

『如彼云ふ男が附纏つてるんだな。』

令次は振返つて山本の家を見た。と寒い風が吹いて來た。

『何だ詰らない！』

通りかゝつた車夫を呼留めて宿に歸ると、大急ぎで用意をして、その夜の汽車で東京を去つた。

九

田邊に招かれた加留多會に行くために、留子は手づから喜智子の衣物などを出してやつて、一番立派な、一番華美なもので飾り立てゝやつた。

『指輪は二つだけでは淋しいから、今一つのダイヤのも箝めてお出で。』

など云つて行つたり來たりして、

『おや、此の襟は眞珠が一つ取れてるよ。先日買つた新しいのにしたら可いでせう。』

それから、女中どもにまで喜智子の飾り立てた樣子を見せて、衣物と

襟の色合とか、羽織と帯との調和を批評させるなど、それは〳〵一通りの騒ぎではなかつたが、喜智子は殆ど人間とも思へぬまで美しくなつた。

後で一人になつたとき、喜智子は大きな姿見の前に立つたが、我と我が美しさに驚嘆して、凝と見詰めて微笑んだ。

黄金の時計、黄金の鎖、眞珠を鏤めた襟、三つも嵌めたダイヤモンドの指輪、衣物、帯、羽織、そして未だ外套！

『今夜行つたら、田邊さんは何と仰有るだらう？如何人が來たつて、これなら些とも恥かしいことはない。』

斯う思つて再び微笑んだ。自分の笑顏！何と云ふ美しさだらうと思つた。

時刻が來ると、命じておいた馬車も來た。留子は天使のやうな娘の美しさに見惚れながら、田邊男爵の邸に急がした。

西洋室の應接間には、安子の姿が既に見えてゐた。〇〇男爵夫妻に令嬢、△△大佐の夫人に令嬢、或は何大臣秘書官とか樞密顧問官などの夫人令嬢が、温室で咲かせた梅と桃と櫻とを挿した大花瓶の周圍に集つて饒舌つたり笑つたりして互ひに自分の着物を密かに誇り合つてゐた。

田邊は一々客を玄關に迎へて、如才なく交際の秘訣を盡してゐる。馬

車腕車の數が段々と殖えた。

主人の案内によつて、廊下傳ひに日本室の廣間に集つた。此處も華々しく裝飾が施してあつて、主人の顏は悦びに充ちてゐた。

安子は質素な態であつた。黄に光るものなら一つもない、拗たわけでもあるまいが、却つて其處に奥床かしいところがあつた。

源平に分れて戰ひは始まつた。疊に觸る指の音、札の飛ぶ音、無意識に出る人の聲、浮世を忘れた騒ぎが起つた。

『何うも川岸さんのお強ひのには驚きました。』

『本當ですよ。斯樣お強い方は私初めてよ。』とは自ら東京に敵なしと許してゐる、某の夫人が叫んだ言葉であつた。

『本當にお上手だこと。』

『恰で電氣仕掛のやうね。』

『人間業とは思へないわ。』

『全く恐れ入りました。』

田邊は始終安子の側を離れないで、折さへあれば何とか話しをしかけてゐる。安子が田邊を見れば、田邊も安子を見る。二人の間にか何か通つてゐる或物があるやうにさへ見へた。

安子が笑へば田邊も笑ふ。安子と許り馴々しく話すのだらうと思つた喜智子は何故田邊が彼樣に安子と

昨夜も何だか變だと思つたが、今夜の樣子は全く可怪い。未だ漸く二三日前に知合つた仲だのに、何うして斯樣に親しくするのだらう？而して私には、他人のやうにして、安子に話す半分も口を利いてくれない。

『何うしたんだらう？』

彼方の隅から、

『田邊さん、今度は貴方と川岸さんとの御勝負を拜見しやうぢやありませんか。』と云つたものがある。

田邊は早速承知して、

『やりませうとも！決して敵を選んで戰ふやうなことは致しません。』

『ホ、、、、田邊さんの大膽なこと。』

『彼れが眞の勇士よ。』

『勇ましいわね。』

など、方々から冷かす。

喜智子は、安子が厭だと云へば可いがと思つた。然し安子は嬉しさうに笑つて、田邊と對ひ合つて座つた。廿五枚づゝの札は、互ひの計略に從つて排列せられた。

滿場の注視の中に勝負が始められた。聲自慢の某博士の夫人が聲張上げて讀出した。

田邊は到底安子の相手ではない、見てゐるものは皆笑ひ轉げた。

『餘興ですよ。』と、誰かゞ云ふ。

『田邊さん、中押ですわね。』

『最うお止しなさいよ。』

斯樣ことを盛んに云つて笑ふ。

中止と云ふことになつて、更に皆の勝負が始まつた。

『私とならば丁度可いわ。』と、喜智子は田邊と安子との勝負を思つて心で呟いた。

一勝負が終つて、丁度田邊が喜智子の側に來たので。

『田邊さんとお願ひ致しませうか……。』と云つて、男の顔を媚びるやうに見て云ふ。

『最う直きにお休みにしますから、そしてからお願ひしませう。』

喜智子は不快に耐へられなくなつた。

別室で中休みをして、御馳走の皿が並んだときも、田邊の視線は絶えず安子に注がれてゐた。それを見る喜智子の心は張裂くやうであつた。

『あゝ斯樣ことなら來るではなかつた。何の爲めに來たのか分りやしない。』と、幾度思つたか知れない。

喜智子がナイフもホークも取らうともしないので、田邊は側に來て小

さな聲で聞いた。

『何うかなすつたんぢやありませんか？』

『少し頭痛が……。』

『そりや不可ませんね。甚くお悪いやうですか。』

『いゝえ、其様に甚いことはありませんけど……。私人群の中に交つてると、何時も斯うなんですから。』

喜智子は田邊にこれだけ云はれた言葉にも非常に嬉しく感じた。矢張り私の顔色も注意してるんだ。と思つた。が、最う田邊は安子の側に行つて、頻りと何か話して笑つてゐる。それを見ると、忽ち喜智子の嬉し

く感じたことは消えて了つて、不快な雲が凄まじい勢ひを以つて包んで來た。

休憩の次に再び戰ひが開かれた。然し喜智子は、他の室に入つて、煙草を喫つてゐる貴婦人連の中に交つてゐた。

留子は娘を探し出して、

『何故斯様處にゐるんですよ。』と、心配さうに小聲で聞いた。

『私最う加留多なんか厭ですもの……。』

『何ですよ、其様ことを云つて。』

『だつて……私最う歸りますわ。』

『其様失禮なことを云ふものぢやありません。皆さん方が面白く遊んで被在るではありませんか。さア此方に被來い。』

『私此處にゐたいんですから、母様關はずにおいて頂戴よ。』

『今夜は一體何うしたんです。』

留子が困つてゐる處に、偶然田邊が來た。

『喜智子さん、未だお惡いんですか？何だかお顏の色も好くないやうですね。』と、覗くやうに見て云ふ。

『私今夜失禮致したいと思ひますけど……。』

『何故です？今度は僕に一つお相手をさせて頂かうぢやありませんか。喜智子さんになら僕だつて負けない積りですよ。』

『安子さんとは最うおやりなさらないの？』

穩かに云つたが、其の眼は霑んで光つてゐた。

『やア何うして〳〵、迚も僕などの敵ぢやないです。實にお強い、皆さんが驚いてらつしやるんです。』

戰場には笑聲が起つた。

『喜智子さん、被來いよ。』

『さアお出でなさいよ。』と、母も云ふ。煙草を喫つてゐた連中は、何時の間にか姿を隱してゐた。

（十）

令次は彼の晩の夜瀛車に乘つて、翌日の夕方家に着いた。

瀛車中は盛んに同乘車の客と四方山の物語りをして氣を紛らしてゐたが、恰で夢路を辿つてゐるやうで、眠りかゝると直ぐと厭な夢に襲はれて眼が覺めた。

『最う決して喜智子のことは思ふまい！』と幾程心を決しても、美しい喜智子の顏が浮出すやうに現はれて、あゝ其れが他のものになるのかと思ふと、情けない、淋しい感じが絶えなかつた。

家に歸ると、二十年以上も使つてゐる平吉と云ふ老僕が、主人の姿を見るなり飛んで來て、

『旦那樣、昨夜あのう、春風が犢を產みましたゞよ。可愛い好い犢が出來ましたゞ。』と、ホク〳〵喜んで告げた。

春風と名けた牝牛は、非常な高價で米國から買つたもので、令次の最も大切に育てゝゐる大牛である。

『ほう！其りや目出度いな。』と、何時か今までの悲しい感想は、朝日に會つた靄のやうに掻き消されて、自分の運命が俄かに改造せられたやうに思はれた。

令次は書齋に入つて、老婢が進める紅茶を飲んで、留守中にあつた出來事を細かく聞き正した。そして喜智子に對しては、

『自己の運命は自己で判斷することは出來ない。時機が來れば更に局面一轉して、新たなる悦びが湧いて來るかも知れない。他に憑つて何物でも求めやうとしたのは、自分の大ない愚であつた。これからは一層精神の修養に力を盡して、肉體の健康に意を注ぎ、完全なる人格を作らねばならぬ。』と、決心した。

令次の家は、古く煤けた、只だゞつ廣いだけの構へで、間數が非常に多く、田舍の寺のやうであるが、令次には此家ほど住心地の好い、愉快な處はないのである。令次の父も母も祖父も祖母も、皆此家で生れて此家で死んだ。令次は自分も此家で死ぬのだと決めてゐる。それに又、令次は斯うして父母の遺業を繼いで、祖先が殘してくれた田や畑を見廻つてゐると、父母も祖父母も未だ此世に生きてゐて、自分の事業を監視してゐるやうな氣がする、雞が殖える、牛が殖える、果樹園が擴張されるこれ等のことは令次に取つては萬卷の經を誦むよりも、祖先に對しては功德になると信じてゐる。

夕飯後、下男等の集つてる室に行つて、自分の留守中に命じておいた果樹園の手入、小舍の修繕等について、彼等の趣味ある正直な話しを聞

いた。

『旦那様、春風の犢を御覧なさつたかねえ。』

『未だ見ないよ。好い犢だつてぢやないか。』

『好いなんて、其りやお話しにはなんねえだよ。』と、他の僕が云ふ。

『未だ見んねえなら、ちよつくら行つて見て來なせえ。見ねえぢやお話しになんねえでがすよ。日本國中探し廻つても、彼樣な好い犢たら半疋だつてありやしましねえ。旦那樣、錢金に代へられるもんぢやねえでがすよ。私い云ふこと嘘と思つたら、ちよつくら行つて見て來なせえ。』

『提灯點けますかね。』と、平吉は主人の命じもしない、行かうとも云はないのに、早や弓形に屈んだ脊を伸ばして、壁にかけてある提灯を下ろした。

『ぢや行つて見て來るかね。』

『見てお出でなせえよ。旅の疲勞なんか一日で治つて了ひますだ。』

令次は裏門を開けて、小川の向ふに建て連ねた牛小舍に行つた。草一筋見えないほど掃除が届いてゐて、平吉が持つてゐる鍵で小舍の戸を開いた。中央に道が附いて、コンクリートで固めてある。その兩側が幾個かに仕切つてあつて、白、黒、斑、虎毛などゝ種々な牛が入れてある。

春風は第一號の小舍にゐるのだ。

『そうら……。』と、平吉が先に立つて燈火を見せた。

大きな牛は横になつたまゝ、怪しげな顏をして此方を見た。

『吃驚ことねえだ。可えだよ〳〵。』と、平吉はニコ〳〵もので犢の頭を撫でゝやる。

『平吉。』

『えツ。』と吃驚して手を引く。

『好い犢が出來たねえ。』

『えゝえ！俺はア、旦那樣が突然に平吉云つたゞから、吃驚ましたゞ、ハヽヽヽ。』

『眞箇好いぢやないか。』

『好いの惡いのつて、最うはア其樣なことは夙の昔に通り超してますだよ。』

平吉は犢の頭を頻りに撫でゝやつて、

『うゝ可えだ〳〵！好く生れた、天下一品、天下一品！。』

『も少し此方に燈火を持つてお出で。』

『はい〳〵。好うツく御覽なせえよ。爪の垢ほどでも不足な點があつた日には、平吉がこれに代つて申開きをしますだ、はア。』

令次は今は氣も伸々として來た。かう云ふ可愛い犢を見て、かう云ふ

僕など、祖先の遺業を繼いで行く我が身の幸福を、深く〳〵感じたのだ。

（十一）

何時か世は朗かな春となつた。遠山の雪も消えて、野には若草の芽が伸びた。

令次は決して喜智子のことを忘れてはゐない。夜更けた時など、喜智子に拒絶された當時のことを振廻つて思ふと、人知れず涙に袖を濡すこともあつた。然し彼は、覆水を盆に返さうとは夢にも思はない。一度捨てられたら最うそれで澤山だと思つて、一生懸命に事業に熱中して、彼れが所謂『祖先の遺業』を益々繁榮にすることを片時も忘れなかつた。

東京の恒春からは屢々書面が來て、是非とも上京して上野の花を賞せよと云つたが、東京に出て、舊傷に觸るやうなことはしたくないと、其の度毎に事業の多忙にかこつけて斷つた。

令次は妻の外に戀人を得ようとする人間ではない。彼の戀人は即ち妻で、『祖先の遺業』を手傳つてくれる人でなければならぬ。時に孤獨の寂寞を感じないこともないが、そのときは何時も自分の愛する妻を想像して、其の妻と此の神聖なる事業に從事することの悦びを想うて、自ら勵

まし自ら慰めて日を送つた。

汗も出やうと思はれる一日。

令次は獵犬と平吉とを連れて、宇治川の邊りに銃獵に出かけた。圓く刈り揃へられた茶は、綠り美はしい柔かな葉を揃へて、見渡す限り一面其れが連つてゐる。春の日はいやが上にも人の全身を照らして、空は遙かに遠く蒼々として擴つてゐる。活きとし活けるものゝ、今日は樂しみに充さるべき日である。

此日を狩り暮して、袋には重い程の獲物が入つた。人も犬も、滿足と塵埃とに包まれて、肌寒を感じる頃宇治の停車場に來た。丁度奈良行の

列車が着いたところで、改札口を外に出る人々を、見るともなく見てゐると、毛皮の外套を腕に抱へた一人の紳士が眼に附いた。

令次は駈け寄つて、

『大野君！僕の家に來る處ぢやないかね。』

恒春は勇ましい令次の姿を眺めながら挨拶した。

『好く來てくれたね。皆さんお變りもないだらう。』

『有難う。皆壯健だ。何うだい君の方は、牛が殖えたかい。』

『有難う。此分では殖える一方だ。』

趣味の異つた此の二人が、かう親しい仲となつたのも不思議である。

二人は歩きながら語り出した。

『何か用でもあつて來たんかい。』

『外にも少し許り用があつたが、まア君の健康を祝したいと云ふのが目的だ。』

『其りや有難う！』

『一つは京都に用があつてね、實は僕の有つてる土地を賣りたいと思つてるんだ。』

令次は友と會つた嬉しさの外に、喜智子が結婚したか何うかを聞く機會を得たのを悦んだ。聞いて見たい〳〵と思つてはゐるが、さて山本家に關したことは一つも口に出せない。

『今日は獵かね？』

恒春は後ろに從ふ僕が持つてゐる、獲物袋を見て、

『大分入つてゐさうだね。』

『うゝ、大分あつた。田舍の鳥料理でも御馳走するかな。』と、平吉には急いで歸つて、お客の用意をしておけと命じた。

犬は主人の側を離れない。

『眞箇君は羨ましいよ。廣々とした果樹園、莫大な土地、又は牛とか豚とか、斯樣良い犬まで、人の慾しいと思ふものは皆持つてるんだもの。』

『その代り一つ缺けたものがある……、これは君の羨望の外だ。』

恒春は令次がかう云つた言葉の意味を解したか何うか知らないが、何とも云はずに輕く笑つた。

『山本さんの方にも、變つたことはないかね？』

『ない處か君。喜智子が死にかゝつてるんだよ。』

『え！』

令次は蒼くなるまで驚かされた。

『君、其りや本當かい？現在かねがねの約束に別條ないと云ふことになつたんだ。』

『現在だとも。然し最早生命には

時は大變な騷ぎだつたよ、醫師も到底六かしからうと云ふんだからね、兩親なんかは毎日毎晩只もう泣き明かしてゐた始末さ。』

『其りや些とも知らなかつた。』

『最う心配はないさうだ。僕の家内も一週間許りは詰切つてゐたが、僕が立つ二三日前に歸つて來た。醫師も非常に勸めてるさうだから、今少し快くなつたら關西地方へでも旅行しようと云つてる位ゐだ。』

其れでは未だ結婚はしてゐないらしい。と令次は安心したやうなもの丶、其の點を確めない中は落着いて話しをする氣もしなかつた。

『京都のお妹さんも無事かね。』

『安子？ハヽヽ、餘り無事でもなさゝうだ……。尤も僕未だ寄らないから知らないがね。』

『矢張り御病氣かね。』

『うゝ……。』

恒春の返辭は餘り明瞭しない。然しそれはさう強つて聞くべき必要もなく、又聞きたいとも思はない、只喜智子が結婚してるか否かを聞き出さうとする導火線たるに過ぎない。

『田邊とか云つたね、あの軍人は何處にゐるんだらう？』

『先日から京都に行つてたつて云ふが、今は何處にゐるかね……。』と令次を凝と見てゐたが、

『中原の鹿は君の手に追はれるだけだよハヽヽヽヽ。僕は何もかも知つてるんだ。最初から君の競爭者は田邊だと思つてゐたんだ。』

『やア其りや何うも……。』と、眞赧になつた。

『僕が君だつたら、早速東京に行つて喜智子を見舞ふんだ。そして、病床の彼女を懇ろに慰めてやつたら、必ず勞せずして彼女は掌中のものになると思ふ。』

この場合、令次は去る冬に受けた彼の恥辱を回顧しないわけには行かなかつた。彼のときの苦痛は、未だに觸れば痛む傷として殘つてゐる

のだ。

令次は自分が喜智子に拒絶されたことを、恒春が知つてるだらうかと疑つた。眞逆に知つてはゐまいが、それとも喜智子が誰かに話して、轉々して恒春の耳に入つたかも知れない。喜智子は姉の鳥子に話しはしなかつたらうか？

『僕は喜智子さんには、實は一度振られた男なんだ。再び重ねて振られちや詰らないから、今度は僕の方からは遠慮することにしようよ。』

恒春は驚いて、

『何だつて？喜智子から振られたつて！』

令次は苦笑した。

『此前東京に行つた折だらう？ぢや駄目の筈だよ。彼の時は君、田邊崇拜の時代だもの。』

『然し僕は、負惜みを云ふやうだが、實際は田邊と云ふ人ではなく、爵位を求めてゐたんぢやないかと思ふ。』

『然うかも知れない。何にしても、あのお母さんが大變な田邊信者だつたからね。喜智子の心が動き出したのも、全くお母さんが盛んに尻押をしたからだ。だが彼の貴族然とした田邊の態度は、全く若い女の血を湧かすよ。』

「僕は田邊に貴族然たる點は一つも見出すことは出來ない。彼樣のは決して貴族と稱すべきものゝ態度ではないよ。聞けば田邊の父親と云ふ人は、酷い不倫な行爲をしたと云ふが、又あの母親――これは未だ生きてる人のことだから、公然と話しては氣の毒だけれど――。貴族と云ふべきものは、其樣穢れた血統を受けてゝは其の資格はないと思ふ。少くとも三代四代、純潔なる父祖の血統を引いて、人に賴ると云ふやうな意志を有たず、政黨に買收されるやうな卑しい心を有たず、僕のやうに一筋道に祖先の遺業を繼いで行くのが、眞實の意味に於ける貴族と思ふ。決して……。」

「おい〳〵、議論なら家に行つて緩くり聞かうぢやないか。」

最う令次の邸は間近くなつた。長く連つた竹籔を通り拔けると、令次の果樹園が見渡す限り續いて、花を附けた桃の枝が、譬へやうもなく美しい。

「廣いものだねえ！」

「此處から見えてるのは眞の一部だよ。嫌でなかつたら明日にも僕の事業を觀てくれ給へ。」

「是非何卒。全く羨望の至りだねえ。斯う云ふ處で暮して行けたら、實に喜智子は一生の幸福だ。」

『何うだか。男爵夫人の方が幸福だらう。』

『假ひ其れが幸福だつても……。』

恒春は云ひかけて止した。然しその後を令次が氣にして聞き正すのでない。必ず君の手に入るから

『最う君の外には、彼の心を動かすものはない。必ず君の手に入るから然う心配しなくつても可いよ。』

『心配なんかしやしない。最う忘れて了つた。』

『些か疑はしい忘れ方だね。』

『僕は舊傷に觸つて痛い思ひをするのは嫌だ。此の傷が全治して了はない中は、決して自ら手を出すやうなことはしない積りだ。』

溝の中から烈しい羽音が起つて、一羽の鳴が舞ひ上つた。犬は慌てゝ主人に告げる。令次が銃の口を向けたと思ふと、忽ち一發の下に射止めた。

『打たうとも思はないのにハ、、、、。』と、笑つて温かい獲物を下げて行く。

（十二）

櫻花が散り初める頃、令次は四週間許りの豫定を以て、越前加賀越中信野上野と旅行して、最後に上野の驛に着いた。

東京の地を踏んで第一に訪ねたのは云ふまでもなく恒春であつた。

令次が恒春の邸に入つたときは、安子も來てゐた。

鳥子は近頃又恒春が放蕩を初めたので、日夜不愉快な思ひ許りしてゐる。猜疑の念は夢にまで現はれて苦しめたが、又も斯樣ことを人に知らせるのは、自分の家庭の恥を世間に知らすやうなものであつて、次第と物心附いて來る兒供などの耳にも入れたくない處から、今度は默つて忍んでゐる。

安子と田邊との關係は、最う殆ど公然の秘密、安子が夫の耳にも入つてゐる。かうなつては詮樣がないからと、恒春が中に入つて離緣の請求をしてやつてゐるけれども、社會の名譽を重んずる安子の夫は、容易にそれを承諾しさうにもない。安子は早や一月近くも東京に來てゐる。

令次は自分が旅行をして來た途中の話しなど細々として聞かした。

『今度の旅行は、主に植物の栽培上に就いて視察したいと云ふ目的だつたから、なるべく田舍に入り込んで繁華な地方を避けて回つた。それで益する處も多かつたし、發明した點も寡くない、僕に取つては實に有益な旅行だつた。』

斯樣話しが約一時間も續いた。

鳥子が其處に入つて來て、

『明日山本の家で晩餐會をするさうですから、福山さんも是非被來して下さいまし。山本でも如何に喜ぶか知れませんよ。』

『是非行つてやつてくれ玉へ。僕も一緒に行くから。』

『本當に然うして頂戴よ。』

令次は今更山本の家に行つて喜智子と會ふのを苦痛に思つた。葬るべきものなら此儘葬つて了ひたい、忘れねばならぬことなら、此儘そうつと忘れて了ひたい。半殺しにした蛇に、時々水を飲ましてやるやうなことはしたくない、其樣慘酷なことは迚もなし得ないと思つた。

事情を設けて一度は斷つて見たが、鳥子が是非とも來てくれと肯かないので、それではと斷然意を決して行くことにした。

其後令次は眠れなかつた。又しても喜智子に拒絶されたときの感想が雲のやうに起つて來て、拂へど〳〵去らない。情けないやうな悲しいやうな、何とも知れない思ひがする。かと思へば、喜智子と結婚してからの幸福、共に祖先の遺業に從事する樂しみなどが、入れ替り立ち替り心の舞臺に現はれて、一時が打つても眼は冴えてゐた。愈々明日山本の家に行つたとして、其の結果は如何ものであらう？喜智子は如何顏をして自分を見るだらうか、何と云つて自分に挨拶をするだらうか。田邊が如何ふことになつて——令次は今日知つた——確かに自分に對する喜智

子の考へは變化したに違ひはない。其れが事實として、果して如何變化が喜智子の胸に起つたらうか？

何時までともなく斯樣想ひを續けてゐたが、到當眠つて了つて、眼が覺めると最う日光は一杯に窓から差込んでゐた。

例の空想と追想とを續けて、悲しんだり喜んだりしてゐる中、何時か夕方が近づいて、山本の家に行くべき時刻となつた。

鳥子と安子とは、一歩先きに家を出た。安子は今夜田邊の顏が見られるので、その嬉しさで胸を躍らせてゐる。

令次は一番遲れて俥を飛ばせた。山本の玄關を上ると、横の廊下から

恒春が出て來た。

『丁度可かつた。これから始めやうとする處だ。』

『遲くなりはしないかと、大變心配して急いで來た。』

『遲いことはない。喜智子も蔭ながら君の來るのを待てゐるやうだよ。』

と、恒春は友の肩を叩いて、

『大將、今度は確乎頼むぜ。』

『一體、今夜は如何人が來てるんだい』と、令次は無邪氣に聞いて見た

『何有親類のもの許りだよ。左も右來玉へ。』と、客室に行つた。其處に行くと令次は直きに喜智子の姿を見た。最う病後の疲れも復つてしまつ

て、以前にも増した澤々しい顔になつてゐた。

令次は喜智子の顔を見ると、急に胸が一杯になつた。喜智子も直ぐと令次の來たことを知つた。

『喜智子さん、お父さんは？』と、恒春が聞く。

『最う直きにまゐります……。』喜智子の眼には、何故か泪が溢れるやうに溜つてゐた。眞箇喜智子は泣きたい程嬉しかつたのである。

つと令次の側に寄つた、

『久濶でございましたわね……。』と、美しい頸を下げた。この場合これだけ云ふのも喜智子には一生懸命であつた。

恒春は何處へか行つて了つた。令次と喜智子とは、少時立つて話してゐた。

一同が食堂に入ると、恒春は令次を喜智子が附くべき席の横に附かせた。恐らく令次の皷動よりは、喜智子のそれの方が烈しかつたに違ひない。

食事中は盛んに議論が交換されて、笑ふやら叫ぶやらが續いたが、其の騒ぎを利用して、此方の令次と喜智子とは話しに遠慮する必要がなかつた。

女客の方が先づ食卓を離れて客室に移つて行つた。令次はその後に

従いて一緒に行きたかつたが、人の手前さうも行かず、心を外にして尚ほ他の客と話しを續けた。

それから皆が客室に行つたとき、令次は籠を出された鳥のやうに急いで、一秒間でも早く喜智子の顔を見たいと急いた。そして客室に入つてからは、喜智子の視線が始終人と人との隙間から令次の方へ投げられたそして喜智子の顔は令次を見ることの出來た嬉しさに輝いてゐるやうに見えた。

客間には幾個も圓卓子がおいてあつて、人は思ひ〳〵に其れを圍んで話しに耽つた。

令次は隅の方の誰もゐない卓子に附いて、

『僕が來たのは偶然だつたでせう？』

喜智子も其處の椅子に腰を下ろした。

『はア……、昨日姉が電話で知らしてくれましたから……。』と、顫聲で云ふ。

今は嬉しいよりは何だか極りが悪くて、先に令次を失望させたことが非常な罪惡でも犯したやうに思はれる。てれ隱しに喜智子は紙の片端を取つて、それに鉛筆で樂書を始めた。

『喜智子さん。』と、女の顔を見て、

『僕は貴女にお尋ねしたいと思つてることがありますが……、答へて下さるでせうか。』

『如何事でせう？』と、心持ち赧くなつた。

『常に僕の心にあることですが……、鳥渡鉛筆を拝借しませう。』

喜智子が渡してくれた鉛筆を取つて、令次は手帳から一枚の白紙を切り取つた。

『可いですか。僕の問ひを書きますよ。』

令次は斯う云つて、スラ〳〵と次の英語を書いた。

When You aaid, "it is impossible, "Was it impossible then, or a'ways ?

『貴女が『其れは出來ない』と仰有つたのは、其時は出來なかつたのですか、又は何時だつて出來ないと云ふのでしたか》

喜智子は其れを受取つて、凝と考へるやうに讀んだ。

これが一生の大事であると、令次は熱心に喜智子の顔色を凝視た。喜智子は男の顔を仰いで、

『私、此處にお答を書きますから……。』

『お解りになりましたか。』

『はア……。』

Then I could not answer piffierently.

（彼の時は、外にお答へすることが出來なかつたのです。）

斯う書いて耳まで眞赧にした。

『お解りなすつて？』

『ぢや……彼の時だけですね？今は？』

『今は……。』と、急に垂頭いて、

『福山さん！』と、喜智子は卓子の上に涙を散らして、慌てゝ其の上に手を載せて、闇い方を向いて了つた。

令次は卓子の蔭で確乎と柔かい女の手を握つた！

喜智子の手は顫へてゐた。

『最う……何卒、以前のことは忘れて下さいまし。』

『忘れよと仰有るんですか？』

『許して……忘れて頂戴！』

『喜智子さん！僕は其後如何に……いや云ひますまい。僕は田舎にゐる間も、暫時も貴女のことを忘れたことはなかつたのですよ。寐た間も貴女のことを思つてゐました。遠くから貴女の幸福を祈つてゐました。』

『私今更何と申上げて可いのか……。皆私が惡かつたのですから、何卒過去のことは宥して下さいまし。』

『宥すも宥さないもありません。僕は只々これから先の幸福を祈るだけ

です。』

不意と留子が入つて來て、

『今夜芝居はお止しでせうね？最う遲くなつたからお斷り申した方が可いだらう。』

喜智子は母と共に芝居に行くからと、他の友人を誘ふ約束をしてゐたのであつた。

令次は鳥子と喜智子とに玄關まで送られて歸つた。

喜智子は令次と一生を送ることを誓つた、而して恒春はその間を助けてくれることを承諾した。

（十三）

喜智子は今度令次と會つてから、全く歡喜と光明との褥に坐すことが出來た。令次の戀を拒絶したのが、今では最も大なる自分の苦痛となつたが、然し其れは結婚してから、夫に盡す愛情で償はれることゝ、自ら我が心を安めてゐる。

田邊贔負の留子も、安子との關係が暴露した今日、忽ち贔負の心もなくなつて了つて、喜智子との仲が彼の位ゐで濟んだのを、今では寧ろ喜んで、今度は一日も早く娘の花嫁姿を見たいと待つてゐる。

一日、鳥子が來て話したことの中に、令次は異母兄の精が重患に陷つて、今にも死にさうな容體だから、用の濟み次第、一刻も早く行つて見舞はねばならぬと云つてゐた、と云ふことがあつた。それを聞いて喜智子は最う自分の義兄が瀕死の狀態に陷つたやうな氣がして、泣き出したい程悲しく感じた。それで直ぐに令次の宿に行つて、

『お義兄さまは大變お惡いと云ふぢやありませんか。それだのに貴郎何故早く被來らないんです。』と、詰るやうに云つた。

『今から行かうと思つてた處でした。』

最う行つても間に合はないかも知れぬ。兄は未だ意識が殘つてるか知ら、最う私の顏も見えないやうになつてゐはすまいか。などゝ思つてゐた。

『私も御一緒にまゐつて宜しう御座いますか。』

『何處にです。』と、驚いて聞く。

『お義兄さまの處に。私出來るだけ御看護を致したいんですから。』

『いや、其樣必要はありません。御親切は有難いが、決して貴女にまで御心配をかけることではありませんから。』

令次は、彼の汚い家に橫はつてゐる異母兄の有樣を想像して、喜智子を連れて行くには忍びなかつた。それも今にも死なうと云ふ病人、無學

な怪しい女、誰が見たつて快感を呼び起すやうな光景ではない。さう云ふ處を喜智子に見せるのは、令次に取つて忍びないことであつた。

『だつて、私の爲めにもお義兄さまぢやありませんか。』

『其りや然うに違ひありませんけど……。』

『其れに私が御看護申す必要がないつて……、其樣ことを仰有つては私心細くなつて了ひますわ。』

令次も今は詮方なく喜智子を連れることに決心して、大急ぎで精の家に赴いた。冬と違ひ、最う何だか一種忌な臭ひがする路次を通つて、精の家の前まで來ると、

『ま……待て……』と云ふやうな、病人の苦しい聲が漏れた。それを聞くと容赦もなく格子戸を開けて、

『兄さん、令次がまゐりました。』と、殆ど無意識に叫んで駈け込んだ。

煤氣て眞黑になつた天井の下、破れた障子の方に頭をおいて、精は垢臭い蒲團の上に苦しさうに臥てゐる。

『平生が餘りお酒を飲んだものですから、それで斯樣重い病氣なんかに罹るんですよ。斯んなことになるのは、初めから知れ切つてまさアね。』

變な彼の女は、悲しさうな顏もせず、令次を見ると直ぐと斯う云つた

『醫者には見せてますか？』

令次の語調は嚴とした。

『直き其處のお醫者に診てもらつたんですが、今夜が臨終だらうつて云つてました。』

『今夜？』

覺悟はしてゐたが、かうと聞いては涙が出た。これが異母兄の精ではないか。何と云ふ慘憺たる一生だらう、主義に殉死した英勇の末路は、さても〳〵哀れなものではあるまいか。と令次は涙を拭つてツク〴〵病人の顏を見た。額から顎の邊に、玉のやうな汗が出て、長く短く、微かに漏るゝ不規則な息が、今にもすうと止みはすまいかと危ぶまれる。

『兄さん！兄さん！令次ですよ。』と、耳に口を當てゝ叫んだ。

聞えたのか精は僅かに眼を開いた、瞳の色が變つて了つた。

『お義兄さま！私令次の家内でございますよ。』

今まで泣いてゐた喜智子が、續いて病人の耳に口をつけた。

『貴方のお神さん？おや然うですか。』と、呆れたやうに怪しな女は眺め出した。

『あゝ……う……。』と、病人が苦痛を叫ぶと、令次は自分で良い醫者を招んで來るから、後を賴むと喜智子に托して出て行つた。

如何に急いだか知らないが、二十分もすると、なにがし博士を導いて

この不潔な家に連れて來た。驚いたことには、室の模樣がガラリと變つて、病人の枕の覆布も新しいものになつてゐれば、茶器や菓子皿なども並べてある。そして美しい草花が、佳い香を放つて病人の枕頭に挿してあつた。

博士は何とも云はなかつた。そして歸りがけに令次を外に呼んで、

『誠に殘念ですけれど、到底私の力には及びませんから、御都合によつては、外に然るべき醫師をお賴みになつては如何でせうか。私の考へでは、最早投藥の効もないと信じます。』

『然うですか。』

令次は悵然として、

『致し方は御座いません。然し先生、何とか先生のお力をもちまして、同じ死ぬにしても、出來るだけ樂に死なして下さる方法はありますまいか。今は只それ一つが望みです。』

『御尤もです。それでは、又今後御容體がお變りになりましたら、近處の醫者にでも診てお貰ひなさい。私の診た意見は是れに書いておきますから。』

形式だけと思はれるが、名刺の裏に短かい獨逸語の文句を書いて渡した。

『有難う存じます。』

死の宣告を受取つたとも思へる一葉の名刺を握つて、令次は覺えずハラ〳〵と涙を滾した。

今は最う施すに術もない。萬事はこゝに盡さて了つた。

病人の苦しい聲に、ハッとして家の中に駈込んで行つた。風通しの悪い家の中にも、夕に迫つた輕い風がサラ〳〵と吹込んで來て、さなくとも薄暗い室の中が、急に暗くなつて見えると、痩せ衰へた兄の顏が、一刻〳〵と死の手に引寄せられるやうな氣がする。

『喜智さん。これが僕の兄だと思ふと、何ともいへない心細い、淋しい氣がしますね。』

喜智子は涙の顏を上げることも出來なかつた。その上げ得られない顏の中から、氷の小さな一片を匙に掬つて、消えて行くやうな病人の口の中に入れてやつた。

冷たい水のひと滴でも、今は天へ昇らうとする哀れな人の咽喉を通るだらうかと、令次は凝と見詰めて兄の口元を眺めてゐた。

『おう……。』

病人はグット嚥下して、さも嬉しさうな微かな笑が落凹んだ眼の奥に認められた。

『喜智さん、兄さんは喜智さんの情けを、この苦しい頭に解してくれましたよ。』

『お義兄さま……。』

笑が此世の分れであつた。精は靜かに永い〳〵眠りに就いたのである一座森として何等の物音もない、夕の色は次第〳〵と迫つて來た。

『餘りお酒許り飲んでたから、其れで斯んなことになつちまふんだ。』怪しな女は、涙一つ落さず呟くやうに斯ういつて死んだ入の顏を見てゐた。

令次と喜智子との悲しみは、傍の見る目も哀れな程であつた。コーヒーすら二人の口へは入らなかつた。

葬式萬端は總て令次の手によつて營まれたが、こんな裏長屋の狹苦しい家の中から、芝居でゝも見るやうな派手な立派な柩車が出たり、數へ切れぬ程の僧侶が經を讀んだりするのを、近處の人はさも驚くべき奇蹟でも起つたやうに呆れて見てゐた。

そして彼の怪しい女は、丁度火葬場で最後の讀經が濟んだ頃から、何處へ行つたか姿を隱して了つた。

* * * * *

餘り暑くならない中が好いと、喜智子の母はいそ〳〵として令次との結婚の式を急がせた。その式は東京の中央で、第一流の紳士が催ふす式として恥かしからず濟ませられた。そして直ぐと披露の宴が濟むと、新夫新婦は田舎の氣も伸び〳〵する祖先の家へ歸つて、更に今度は遠く新婚旅行の途に上つた。

喜智子は、今では令次と共に、祖先の家で祖先の遺業を繼いで暮すのを何よりの樂みとして喜んでゐる。

* * *

* * *

* * *

安子は見違へるまでに顏色も蒼白く痩せて了つて、如何に其の苦しみと悶えとが多いかといふことを人々に示してゐる。實際安子は、近頃は死を唯一の望みと決してゐる。

恒春は依然として、矢張り浮名を流してゐるが、最う烏子は相手にしまいと思つてゐるらしい。

祖先の家終

祖先の家

葬式

私がラウベインの停車場に行つた時、待合室の時計を見ると、巴里に行くには未だ二時間十分の間があつた。

と、道の十里も歩いて來たやうに、俄かに非常な疲れを覺えて、此の長い時間を、何うして待つてゐやうか、と、壁を見廻して見たが、到頭再び待合室を出て行つて、停車場の門の外で何うしたものかと考へてゐた。

町の中を大きな道が貫いて、色々〳〵な建築や、格好の違つた家が二列に立並んだ間を、荊球花がズラリと植ゑ附けてあつて、小市街にのみ見るやうな通りは、小さな丘を登つて行つて、其の際は公園にでも入つてゐるやうな立木が見える。

幾度となく猫が道を横ぎつて、注意深く下水溝を飛越える。犬が一本一本と立木の根本を嗅いで、臺所口から何か小さなものを探し出して來る。人の影一つ見えなくて、私は退屈で仕様がなかつた。何をすれば好いと云ふんだらう？詰らなくて仕様がないから、停車場の小さな飲食店にでも入らうと、飲めもしない麥酒を求め、讀みたくもない新聞を眺めてゐると、今先私が立つてゐた處に葬式が來た。其の光景が普通とは異つてゐる。退屈まぎらしに好い見物が來たと思つてゐると、棺の後ろには七人の人が從いてゐて、喋舌つてゐるものや泣いてゐるものはあるが一人の僧侶らしい人もゐない。

私は自分で斯う考へた。

『是りや無宗教者の葬式だらう』

然し又、ラウベインのやうな町には、少くとも百人位ゐな自由思想を有つてゐるものがあつて、葬ひの儀式とが、宗教の厄介などを受けないと云ふのかも知れないとも思つて見た。

私は好奇心に驅られて、色々と自分勝手な想像をやつてゐたが、一つ此の七人の仲間入りをして、一緒に自分も葬列に加つて行かうと思つた。然うすれば、一時間は先づ時間を費すからと、私は悲しさうな顏をして七人の人の後に從つた。一番最後にゐた二人の人が、私が途中から葬列に加つたのを見て、驚いて振返つて、何だか咡き合つた。それから前にゐる人に耳打をする、と又外の人に話すと云ふ風で順々に咡き合つては私を凝視めた。私は然うして注意されるのが厭だから、進んで行つてお辭儀をした。

『どうもお話しのお邪魔をして相濟みません。僕は誰方のお葬式だかは知りませんが、市民の棺をお送りしたいと思つて附いて來ました』

『佛は女ですよ』と一人の人が云つた。私は女と聞いて一層驚いて聞いた。

『然し是れは、市民の葬式でせう、然うぢやありませんか。』

他の一人が私に委細の話しをしやうとして、

『坊さんは、教會で葬式をすることを許してくれないんです』

私は驚いた、私は只へえと云つた。何うした譯だか譯が解らない。

『まア色々と事情があつて、お話しすれば長いことですがね、この婦人は自殺をしたんですから、何う云ふ宗教の儀式に依つても

葬むつて貰へないんです。一番前に泣いて行く紳士が、この婦人の夫です』

私は躊躇しながら、

『實に驚きましたが、此の場合如何御事情だつたかを伺つては輕卒でせうか。お差支へがなければ、お話しを願ひたいものですな』

『宜しいですとも。少し後れながらお話ししませう。實に悲慘なことですよ。彼處に木が見えてゐますね、あれが墓地ですが、此の丘を登つて行くので、着くまでには未だ十分間は要りますから』

斯ういつて語り出した。

『此の年若い葉元夫人は、私の隣りにゐる本田と云ふ豪商の令嬢でした。十一の時に或る下僕に戀されて、其の結果始ど死と同然の身軀となつて、惡魔の手は到當令嬢を迷はして了つたのです。可怖しき罪惡の結果は三月の間禽獸のやうな不名譽極まる犧牲とならねばならなかつたのです。そして男は一生刑罰の服從を宣告されました。

令嬢は其後次第と成長しましたが、不名譽な汚辱を受けた爲めに、交はる友もなく全く孤立して、大人だつて此の令嬢に接吻してくれるものはなく、額に唇が觸れでもすれば、其の唇は穢れて了ふと思つた程で、町内でも恰で不具者か何ぞのやうに見做されてゐたんです。其れで

皆が『あの本田の尼が』と呟やき合ふ始末でしてね、令嬢が往來でも横ぎらうものなら、通り掛つたものまでが直ぐ様引返して了ふと云ふ風です。だから兩親にしたつて、一週間も要つて令嬢の乳母さへ探すことが出來ず、外の召使ひのものも、側に寄れば毒にでも當てられるやうに、令嬢の側に寄附くまい〳〵とするのです。

夕方何時も、令嬢が近處の娘と一緒に遊びたがる様子と云つたら、其れは實に不憫なものでして、令嬢は自分から遠慮して、子供の仲間に入らうとはしなくて、女中に捕まつて立つて、外の子供が樂しさうに遊び廻つてゐるのを眺めてゐるのです。時々外の子供の許しを受けて、一緒に仲間入りをすることがあつても、實に神經過敏な様子をして、ビクビク少して附いて行く様子が、自分でも不名譽な身軀と云ふことを自覺してゐるやうでした。すると直ぐと子供等の母親なり、伯母なり、又は乳母なりが飛んで來て、行きなり自分の子供を引抱えて、あんな女と一緒に遊んでは身軀が穢れるとでも云ふやうに、殘酷にも引離して行くのです。

令嬢の方では、何う云ふ譯で皆の子供を連れ去つて了ふか、其んな譯は分らず、一人ぼつちになつて呆やりしてるが、今度は胸も裂けん許りに泣叫んで、走り歸つて乳母の裾に顔を隱して泣くのです。

成長するに隨つて、斯んなことが益々烈しくなつて來て、娘を持つ親

達は、傳染病に罹つてるものにでも接するやうな調子で、自分達の娘を近附けない。令嬢は何一つ學んだ覺えはない。其れだのに驚くべきことを知つた。未だ書も讀めないのに不可思議を察した――世の母親が、娘の婚禮の夜に、其れと知つて戰慄することで、而も娘には察し知ることを許さない、其の不可思議を察したのでした。

令嬢が町を通る時は、何時も附添の女が附いてゐました。親が娘の恐るべき冒險を恐るゝやうに、此の令嬢は常に自分の不可思議なる不名譽の重味の爲めに悶へてゐました。世間の人が想う程無邪氣でもない他の娘共は、此の令嬢を見て何か和語き合つてはクス〳〵笑ひ、顔を見られると直きに側を向いて知らぬ振りをすると云ふ有樣です。世間のものは誰一人此の女に挨拶一つするものがありません。僅かに二三のものがお辭儀をする位ゐで、其れも若い口さがなき女どもが、例の下僕の名を取つて、仙藏さんの奥樣と呼んだりすれば、世間の母親なども令嬢の顏を見るのも厭がつたものです。

令嬢は人に碌々口も利かず、笑ひ顏一つしなかつたものですから、誰も當人の胸の苦しみを知るものはありませんでした。そして兩親すら、何だか自分共が取返しの附かない失敗でもさせて、絶えず猜疑の眼で見られでもするかのやうに、娘を見ると不快な顏をしてゐました。

世間の正直な男は、赦された罪人にまでも快く握手をしてくれないが、其れが自分の子であつても然うでせうか。そして本田夫婦は、丁度罪人船から許されて上つて來たものゝやうに、自分の娘を監視してゐました。令嬢は美しい蒼白い顏をした、丈の高い痩形な、高尚な人でした。そして私と話しをするのを大變に嬉んでゐました、處がです、此處に不幸な事件が起りました。

最う一年半以前のことですが、新任の知事補が此處に任命されました時、一人の秘書官を連れて來ました。此の人はラチン宿泊所に止宿してゐる人々の中で、鳥渡變つた人でしたが、本田の令嬢を見て戀したのです。そして以前のことについては、單に

『なアに其りや丁度未來の爲めの擔保だ。我輩と結婚する前に起つたことぢやないか。構つたことぢやない。我輩は其の婦人と共に平和に眠るよ』と云つてゐました。

彼は女と約束が成立つて結婚しました。其れから何の不足もなく、何事も起らなかつたかのやうに、國の習慣通り婚禮の儀式も濟しました。人々も別に何も喋舌らなくて、其の事件は次第と忘れられて、令嬢も世間に對して、自分に適當な地位を得たことを喜んでゐました。

其れからと云ふものは、恰も自分の夫が神樣でゐもあるやうに、一生

懸命に心を盡して大切に仕へました。其れは其の筈でせうよ。男は公衆の意見にも恐れず、世の侮辱に抵抗して、普通人の鳥渡眞似も出來ないやうな勇敢な結婚をしたんですもの。

夫人が姙娠したと云ふことが分ると、特種の關係のある人々と、最も大なる同情者とは、恰も母方の親戚に依りて潔白となつたかのやうに、各自の門戸を開いて迎へました。

滑稽な話しだが事實です。かうして萬事調子好く進行したが、或る日のこと、町の氏神の祭りの時でした。知事は役員やら當局者などに取圍まれて、音樂聲裡に正面の席に着きました。そして此の知事の演說が濟んで、葉元秘書官が名譽ある人々に紀念章の分配を初めました。

君の御存じの通り、嫉妬と爭鬪とは凡ての人をして正義を忘れしむるものです。町の令嬢どもは壇上に坐つてゐました。其の中に順番が來てマウル、ミロンの村から來た樂隊長が上つて來たが、此の樂隊が獨り二等賞牌を貰ひました。一等賞牌は如何なるものも貰へないのです。で、秘書官が賞牌を手渡すと、その樂隊長は行きなり賞牌を秘書官の顏に投げ附けて怒鳴りました。

『お前さんは彼の仙藏に賞牌をやりたいだらう。私にくれたやうに、一等賞は彼の野郎にやるんだらうよ』

滿座のものはドツト笑ひ出しました。並居る群集に慈悲あるものはありません。眼と云ふ眼は彼の哀れむべき夫人に向つて注がれました。君は女の發狂者を見たことがありますか。私どもは其れを眼前に見たんですよ。立上つたかと思ふと、續さまに三度まで椅子の上に仰向けに倒れたんです。全く逃げやうとしたらしかつたが、其の群集を押破つて逃ることは出來ませんでした。それと見るや群集の中から叫んだものがある。

『わあい、わあい、仙藏の奥樣』

大騷動が起つて、笑ふやら怒るやら、それが幾度も〳〵繰返されました。人々は此の氣の毒な夫人の顏を見やうと爪立ち上り伸上りしてゐました。中には自分の嚊を抱え上げて、不幸なる夫人の顏を見せやうとするものもありました。そして人々は問ひ合つてゐる、

『どつちが其の女だい！青いのかね』

子供等は恰で鷄のやうに駈け集つて來て、笑ひ聲は祭りの式場に溢れて聞えました。

秘書官夫人は、今は只群集の見世物にでも出されたかのやうに、椅子に座つたまゝ身動きもしませんでした。最う動くことも出來ず、又消えてなくなる譯にも行かず、顏すら隱すことが出來なかつたのです、其の

瞼は烈しい光線が顔に當つたやうに、慌てゝ細くして了つて、險しい山を登つて來た馬のやうにハッ〳〵云つて喘いでゐました。其れを見ては殆ど人の心も亂れました。間もなく葉元秘書官は、此の樂隊長の咽喉を引摑んで、名狀し難い大混雜の中を、二人とも重り合つて式場から地上に轉げ落ちた。そして儀式は中止されて了ひました。

一時間許りの後葉元夫婦が家に歸ると、侮辱されて以後一語も發しなかつた若夫人は、丸ての神經がバネで彈かれたやうに震へてゐたが、突然、夫が引止める暇もなく橫の欄干に飛上つて、川の中に投身したのです。橋の下は非常に深かつたのです。それから二時間の後に、夫人の死體が發見されました。勿論其の時は既に萬事休した後でした。

烏渡口を噤んだが附加へて、

『恐らく是が夫人としては、出來る限りの最良の方法だつたでせう。然し只其處に拭ひ去ることの出來ないものがありまして、君は何故僧侶が夫人の棺を寺に引取つてくれないかと云ふことがお分りになつたでせう。これが自殺でなくして、普通の宗教的葬式でありましたら、町中の人は擧つて會葬することでせう。然し自殺と云ふものは、色々と他の事件にまで影響を及ぼすものだから仕方がありません。それで家族の人も此の式に列せずに謹愼したが好いだらうと云ふので見合はすことにし

ました。宗教的儀式のない葬式に加はると云ふことは容易な事ではありません。』

私等は墓地の門を通り過ぎた。私は委細の話しを聞いて非常な感慨に胸を打たれ、棺が穴の中に下されるまで待つてゐた。私が、烈しく泣いてゐる秘書官の手を握らうと近附くと、彼は涙の眼に驚いて私を見詰めて、

『有難う……』――と云つた。私は此の葬式に從つたことを喜んだ。

葬式終

講談倶樂部

一冊　一錢二稅郵錢廿金
六冊　五十圓壹共稅郵錢
二冊　十二圓二共稅郵錢

誰が讀んでも溜らなく面白い雜誌は「講談倶樂部」であると云ふ事は世間の定評です。毎號、講談、落語、等の素敵に面白いものがドッサリ載せてありますそれに口繪は眼が醒めるやうな綺麗なものばかり集めてありますから、春は花の下、夏は冷み臺、秋は燈火の下、冬は埋火の邊り、皆樣がお友達としてこの上もない雜誌であります。

東京　講談社
大阪　講談社
九二六六番口座

如湧大好評

既刊　第一篇　**佐和山主水**　寺澤琴風著　（定價金貳拾錢）

既刊　第二篇　**祖先の家**　倉富砂邱著　（定價金貳拾錢）

既刊　第三篇　**名物男**　小川煙村著　（定價金廿五錢）

既刊　第四篇　**木村長門守**　夢想兵衛著　（定價金貳拾錢）

講談社
大阪市南區坂町四丁目
東京六二七番

家庭新講談

一冊郵金四錢

近刊　第五篇　**丹後の夜嵐**　大河內翠山著　（定價金貳拾錢）

近刊　第六篇　**義民惣五郎傳**　洞谷司著　（定價金廿五錢）

近刊　第七篇　**木村長門守**（大阪の巻）　夢想兵衛著　（定價金貳拾錢）

近刊　第八篇　**軍事探偵鐘崎三郎**　望月苔峰著　（定價金貳拾錢）

光焰萬丈　趣味清新

雄辯

毎月一回一日發行〇一部廿錢送料
一錢半〇半年壹圓拾錢（送料共）

本邦唯一の辯論機關として創刊既に五星霜を經、誌々として運愈々隆

天下獨歩の徹上徹下 眞面目 剛健なる

雜誌界の珍として囑望せらるゝや切也收むる所は內外大家の高論卓說新進青年の縱論橫議に於て犀利なる舌鋒

天下の經綸を吐き、一代の思潮を語る

其の他風發の論談以て一警醒するに足るべく、また文學に隨筆に記事の橫溢するものあるべし、苟くも向上的青年、辯論に携はれる紳士の必讀せざるべからざるや言ふを要せざる也

發行所　東京市本鄉駒込坂下町四八
大日本雄辯會
振替東京三九三〇番

大日本雄辯會編

青年雄辯集

四六版約四百頁
美裝印刷中

近刊豫告

拳を以て萬能とするは野蠻時代也。筆を以て劍に代ふるは半開時代也。舌を以て筆に代ふるは文明の時代なり。本會は本邦辯論界の爲めに力を致す茲に年あり。今また帝國大學を初めとし早稻田慶應、日本、學習院等の諸官公私立學校の辯に雄なもの、數十篇を集めて天下有爲の青年諸士に寄す。

大山千代雄著＝英雄を作つた英雄傳

プリュターク英雄傳

四六判美裝　約二百五十頁　正價五十錢　郵稅六錢

題目
一、歷山大王
二、シーザー
三、ハンニバル
四、プルタス
五、テミストクレス

英雄を造れる英雄傳にして世界到る所好評湧くが如き偉人の活躍史。ナポレオン・リンコーン等が愛讀して措かざしもの、希望多き有爲の青年は飯をやめても之を讀まれよ！

發行所　大日本雄辯會　本郷駒込阪下町　口座三三〇九

ゾツトする怪事實

最近實話　探偵十種

▲美人枕探し　洋妾お梶の探偵
▲神出鬼沒　短銃強盜清水定吉
▲聯隊旗の行衛　烈婦村田さは子
▲築地通辯殺し　呪の古井戸
▲三人強盜　湯島兩替店の秘密
▲暗殺秘史　少警部中原尙雄
▲強盜殺人犯　阪本慶次郎逮捕の顚末
▲志士の末路　大臣暗殺の陰謀
▲素人強盜　落語家文太郎の入墨
▲殺人變死　漆屋殺し事件

明治三十三年刑事學校に於て、故武東警部が實歷の講演をした事がある。本書は主として材を此に取り、其他當時の新聞紙及老刑事の實歷談に依りて成りたるもの、片々たる架空談と、同一視する勿れ。

一部六十八錢　郵稅六錢　三〇〇頁

東京本郷園子坂　發行所　講談社　口座六六二九

一讀鬼氣人に逼る

（家の先祖）

不許複製

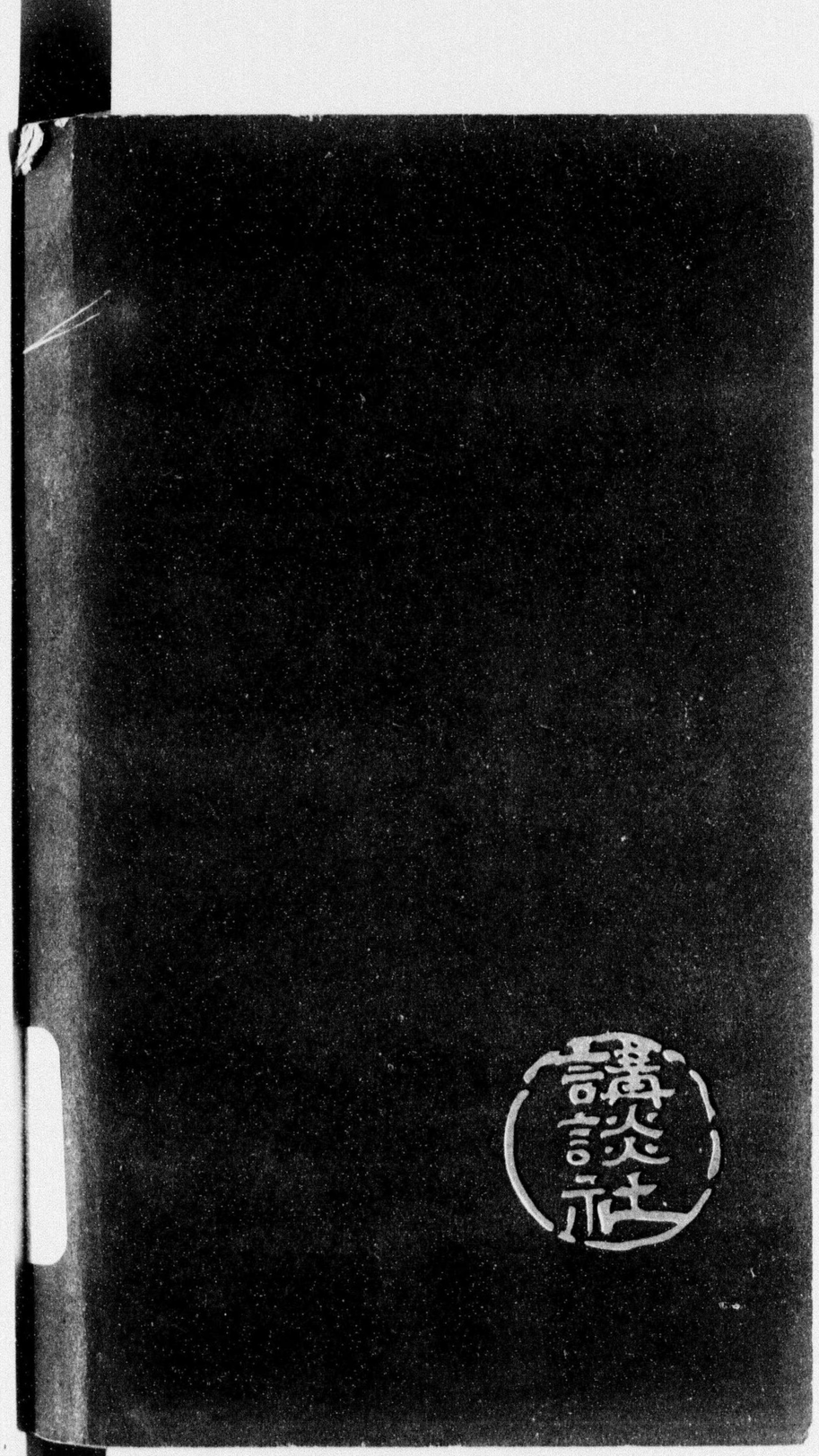
大正二年六月三十日印刷
大正二年七月三日發行

（定價金貳拾錢）

著作者　倉富砂邱
發行者　野間清治
東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
印刷者　山金佐次
印刷所　講談倶樂部印刷所

發行所　講談社
東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
電話下谷四〇五四　振替東京六六二九

大取次販賣所
東京堂　東海堂　北隆館
至誠堂　文明堂

274
302

終